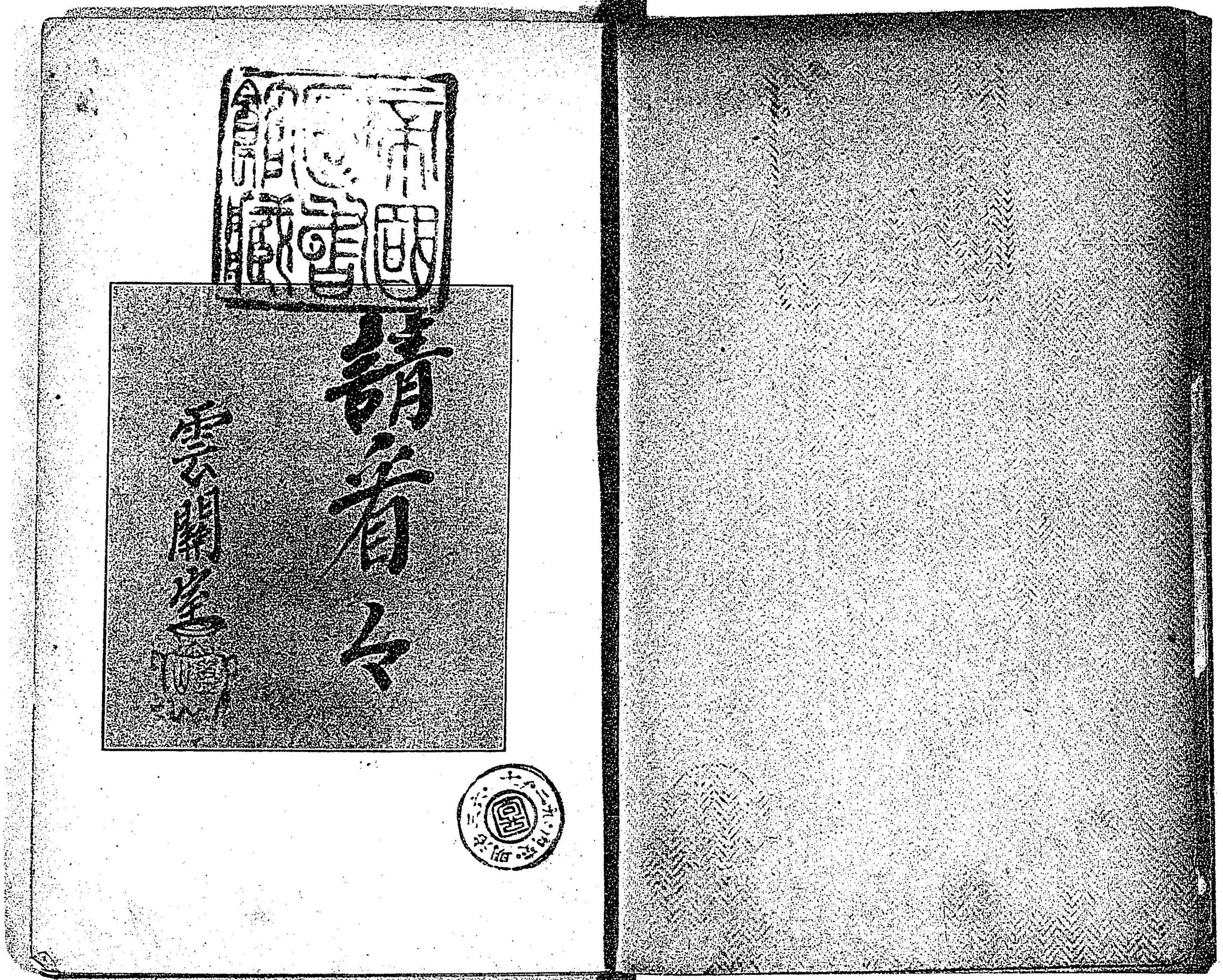
殺活自在
禪定力
安國寺盤山師顗
森脇星江居士編
東京大學館發行



はしがき

性狷介奇峭にして世と相容れず、志望幾度か蹉跌して東西に流寓し、今年又、計らず武藏野の月に對して秋を終らんとす。頭を回らして半生を顧みれば、慨悔悲憤、殆ど泣かんとするものあり。

嘗て亶性の不可なるを憤つて、道を解脫の門に求め、且大和の山間において、趙州の無字を打破し去る。思へらく、趙州の面目決して這裡を出づべからずと。向後峨山、蜻州、盤山の諸大老に歷參して、志氣大に奮ふものあり。再び出でて來つて俗塵に出沒すれば、焉ぞ識らん、事を

理と違反して日用相調和せず。心頭兩路に分れて、却て大俗放心の人に若かざるを。狂と呼ばれ、愚と嗤はれ、竟に今や此處に到る。ァァ、禪果して學ぶべきか。果して學ぶべからざるか。

春風の朝、秋雨の夕、禪門傑出の諸聖が、洒々落々、縱橫無罣なりし奇談を想起す毎に、輒ち、妄念四散して、自ら我の甚だ小なるを嗤ひ、更に復、我が禪の遠く彼に及ばざるを覺る。

頃日、東亞佛教會に舍身居士を訪ひ、語るに此の事を以てす。居士爽然として曰く「箇の糞袋を惜む勿れ」予曰く「糞袋は惜むなきも、妻子飢寒に泣くを見ては、心緒豈安きを得んや」居士更に曰ふ「何ぞ共に死を計らざる」と予乃ち應ふ「理は即ち然り、然も事の之と調和せざるを如何」と乃ち相見て呵々大笑す。

談理は水火を防ぐの堅甲に非ず。寧ろ、古聖の大力量を語つて、心境を樂ましめんか。因て竟に、其の隻語寸談を綴り、名けて「禪。定。力」と題す。

禪何ぞ怪あらんと言ふ勿れ。三毒眼に入つて盲せざるもの、天下幾何かある。俗眼以て、向上の英靈が、電轉び星飛ぶ底の手脚を弄するを見ては、驚嘆の極、甚だ怪と叫

はざるものあるべけんや。

此の書讀み去つて、心膽を大ならしむるは本だ下なり。讀み去つて、心機玲瓏たるを覺ゆるは中なり。讀み了つて、憒然茲に、禪門の關捩を握らんとするものあらば、是れ上の上たるものなり。讀者、予が禪の賤劣なるを見て、逡巡するなくんば幸甚。

癸卯の夏七月

星江しるす

凡例

一　本書は所謂禪定力なるものを具躰的に世に紹介せん爲に古來の高僧及び名士の言行を種々の部類に分ちて集め綴りたるなり

一　其材料の如きは編者の記憶に喚び起せしものありと雖とも地名人名年月等朦朧として不確なりしものあれば

和漢高僧傳　　神僧傳
續日本高僧傳　　扶桑禪林僧寶傳
禪林類聚　　臨濟慧照禪師錄
佛光錄　　大祖壇經
禪關策進　　寒山拾得二幅對
正受老人崇行錄　　雲居寺結緣經後宴歌合

白隱全集
一休可笑記
芭蕉翁行狀記
各宗高僧譚
氷川清話
釋元亨
禪宗(雜誌)
明教新誌(全)
逸話文庫(全)
甲越軍記
一休諸國物語
本田道濱
山岡鐵舟傳
菩提達磨
禪(雜誌)
禪學(全)
大道叢誌(全)

一　坊間在りふれたる材のみ多くして珍奇驚くに足るべきもの丶少きは甚だ遺憾とする所殊に洒々落々たる雅的禪の材料に乏しかりしが爲め其を全く捨て丶唯英氣颯爽たる所謂武禪なるもの丶みを掲げしが如きは殊に編者の慨みとする所なれども這は他日材料の豐富に到るの機を俟つて補綴する事あらん

一　人物年代場所の如きは敢て順序を立てず故に一見材料排列の秩序を紊りし如き觀あれども異彩相亂るゝの所却て一段の面白味を惹起すべき想像し故らに斯くはなしたるなり

目錄

殺活自在……一頁

鐵舟と外敎徒
匡道の狂態
峨山と星亭
森子爵の顏はこしらへ物
峨山丁稚に閉口す
久我環溪神官を困らす

金剛三昧力……一六

夫人の報顏
海舟禪僧を一拶す
大拙と洪川
村田新八繪畫を活す
鐵舟人の切腹を止めず
坦山と雲照

正受老人群狼中の坐禪
勝海舟虎列拉の退治

法顯と黑獅子
名妓鐵眼を挑む
異禪師赤痢を殺す
美人に動かず
道濕亂刃の下に詠ず

極致達道……三一

圓朝と鐵舟
正受菴主の劍術
鐵舟の無刀流
佛頂と芭蕉
橋本雅邦の話
達磨毒を飲む
雲居の膽力
瞑る禪と笑ふ禪
白隱怒濤の中に眠る
勝海舟の談話
力士大浪
澤菴と柳生但馬守
千の利休
茶道の開祖

高橋泥舟の音心

活商量……五八

清涼殿中の問答
東坡妓を携ふ
滴水の自由驚論
馬の圖
一休高野山に失敗す
虎の問答
丙丁童子來つて火を求む
大將軍を恐れず
維摩默然
丹霞木佛を燒く
惠春尼の洒落
聖一國師と菅爲長
寒殺熱殺
謙信と宗謙和尙
念佛の批評
笛一吹
この一喝重さ幾何

格機格外……七五
物外と近藤勇
鐵牛の熱棒
滴水と得菴
虎林强盜を挫く
南洲と刺客
釋元亨
雲井龍雄と鐵舟
大獅子吼……八七
大元と備前侯
天叡僧主の膽をつぶす
唯儼の大笑
義堂と西郷隆盛
峨山の大喝男爵の喫驚
井伊侯茶碗を落す
間部下總守の戰慄
鄧州の號令

生死脫却……九五
電光影裏に春風を斬る
雲峰白刃の下に頸を延す
獨園は我なり
戰陣……一〇三
楠正成
北條時宗の一矚
川中島の陣
臨終……一一二
謙信の三昧
松崎大尉

苦惱なき時如何
清拙和尙
法心死期を知る
普化禪師
臨終の旨訣
坦山の臨終通知
大賢尼
臨終の離別會
腮の長い長四郎
叫聲數里に徹す
一二四
不可思議力
普門の降魔
道元と猛虎
隱元の奇特
不見不聞
訥菴水に投ぜらる
東嶺和尙と幽靈
一休の神通
寒山と拾得
五臺山の文珠
無生法

懷空虎を度す
達磨の幽靈
附錄
證道歌
六祖大師
鄧州二たび怪を見る
一四九

殺活自在

鐵舟と外教徒

森脇星江編

山岡鐵舟は初め頃も佛教を忌み、人の佛を拜し、法を談ずるを見ては痛く排斥して措かざりしが、後劍道の事よりして不圖禪門に歸依し、日夜勇猛の志氣を奮ふて、遂に滴水禪師の印可を受くるに至り、非常なる佛法信者となりたり。

曾て耶蘇教徒あり。山岡を說いて其教門に引き込まんとし、一日數名相率ゐて其宅を訪づれ、快辯滔々基督教の文明的宗教にして、且つ、教法の

善美、他に比すべきなき由を論じ、反覆叮嚀餘す所なかりけるが、鐵舟、初より終迄一言も出さず、謹聽し居たりしかば、教徒等竊に思ふ樣、這は畢竟我らが說法に感服せしならんと、尙ほ喋々語り了るや、鐵舟大いなる欠伸一つしながら、哄然大笑して、又一語なし、教徒、呆然苦笑して終に去る、後復數日を經て、教徒ら屈せずして來り、今度は前日にも增して、痛切なる論說を試みたる上、全躰先生の御意見は如何と、斫り込んだりける。鐵舟、すかさず。サレバなり。貴殿ら、左樣に基督を賞揚せらるゝ共、若し今日の世に於て、其の基督よりも一段エラキ者あらば、如何せらるゝぞ。と問ひければ、教徒ら口を揃へ、果して左樣のものあらば、吾等直に耶蘇教を止めて、其の弟子とならんのみ。されど、其は畢竟誰なるや。と應ふるや否。鐵舟昂然胸を反らし「其の一番エライは此の山岡鐵太郎だ」

夫人の赧顏

大阪の紳士某の夫人來つて天龍寺峨山に謁す。此の夫人隨分學識ありて、見識中々高く、先つ己が女子大學の設立に努力する云々を吹聽し、理屈喃々、氣焰當るべからず。竟に僧侶は煙草を喫つてもよろしいですかと。峨山、恬然として、雲水は嚴禁ぢやが、和尙になつても、餘り豪らばつて無遠慮にやらかすと、しまいには人に擯斥されるさと。夫人赧顏坐に耐へずして去る。

匡道の狂態

妙心寺管長となりて、英名を江湖に轟かせし、蘆匡道禪師の、未だ、神戸奧平野の祥福寺に住せし頃、四方の高才逸足、其の風を望んで、來るもの雲

集す。土佐の鴻儒奥宮慥齋、亦春日潛菴の添書を持ち來つて、面謁を乞ふ。會々不在なりしかば、客室に入つて待つこと半時。漸くにして禪師、歸り來り、衣帶を解きつゝ立ちながら、貴殿が大學者の奥宮さんですか。拙者は只今、忠臣藏の芝居を見て歸りましたが、と言ひつゝ坐に据はり、勘平腹切りの段の眞似などをなし、傍若無人の振舞をなしければ、慥齋は嚴肅端正の高僧と思の外呆氣に取られ、不平の心して立ち去り、潛菴を叩いて、匡道の取るに足らざる小人なるを、呶々しけるに潛菴は其こそ眞の高僧なれ。貴殿の位地ある大儒なるを知りながら、然も初對面の折柄にもかゝはらず、洒々落々、如此は、豈常人のなし得べき所ならんやと。慥齋言を聞きて感悟し、竟に終生匡道の門に入つて、其の鉗槌を受けしとぞ。

海舟禪僧を一拶す

一禪僧あり。勝海舟の邸に到り、閑談數刻會々正午となり、晝餐を饗せらる。禪僧お上手を謂つて曰はく、伯爵と膳を列べて食するは、是が初めてなりと。海舟すかさず「お前さん方の目にも、伯爵が見えますか」と。其僧慚汗衣を濡して一語なし。

峨山と星亨

怪雄星亨が、峨山和尚と問答したる後、人に語つて、峨山多く佛書を知らず。予は佛典に於ては、彼よりも詳しと。サレド、彼が問答中、己に首を刎ねられたるものあり。一節を掲げん。

星　佛教は消極的に陷るの傾きあり。其の所以は、寂滅爲樂を目的とするにあらずや。

峨山　寂滅爲樂とは、四句の偈の末句にして、前なる第三句に生滅々

己とあり。問ふ所の寂滅は眞の寂滅にあらずして、生滅の滅なり。生滅とは、相對の法にして、寂滅は絶對の法なり。生と滅との二つが眼中に遮らざるに至り、始めて寂滅となる。例へば、政黨員の眼に、當の敵見ゆる間は、生滅の位にして、眼中己に對するものなく、天下獨舞臺に至り、初めて寂滅の位に達するなり。之によりて言へば、寂滅は橫極的頂上なり。人もし、修し得て此に至らば眞の大丈夫の働をなすべし。

星、我今、佛門に入らんとせば、何れの所よりか手を下すべきか。

峨山、即今、此の如く問ひ、此の如く答へ、坐中此の如く聽き居るもの あり。是れ何物ぞ。先づ第一に此の一物を知るを急務とす。畢竟自己の心根を明むるを要す。

政界橫行する星が、膽と識とは、峨山の溫言によって已に、粉碎し了れりと云ふべし。呵々。

大拙と洪川

故の圓覺寺派管長今北洪川禪師は、儒を學び、大阪なる藤澤東涯の塾頭たりしが、諸經中一の疑問あり。種々に攻究するも明かならず、東涯に質問するも、其は自己に於て、只自覺すべきの外道なし。但し禪僧なるものは、克く如此とを究め居るものなりと答ふ。洪川此に於て大阪より三十石船に搭し京都に到り、各本山を叩いて飽くまで論戰せんとす。而して、船の伏見に到るの間洪川無聊に耐えず。乘り合ひの客を捕へて、經書を談じ、儒道を論じ、意氣軒昂當るべからず。會々船中垢衣、破笠の一僧あり。風采甚だ昂らず、容貌愚なるが如し。寐ながら獨言しける樣「ア、世の中に物を知らぬものもおると。洪川忽ち肝癪を起し「此の糞坊主と一喝しけ

るに聊かも怒らず。從容として「貴殿は何物ぢや。何用あつて何處へ行かるゝぞ」と問ふに「我は天下の儒者なり。大に論ずる所あつて京都に上り、各本山を叩かんとするなり」と、僧は乃ち欠伸をしながら「其なれば、他を訪ね廻らるゝよりも、先つ相國寺の大拙和尚を訪ねられよ。併し貴殿位では、彼の寺の小僧にも話の相手する者あらん」と。洪川乃ち伏見に上陸し、相國寺に到り、大拙和尚に面會を求めける時、獨園和尚出で來り（獨園和尚此の時未だ雲水たりしなり）應接を初めけるが、談論未だ久しからずして、洪川竟に屈し、茲に初めて感憤し、大拙の弟子たらんとを乞ひける。獨園曰はく、君、大拙の弟子たらんと欲せば、宜しく、妻子を棄てゝ顧みざる可らずと。洪川乃ち大阪にかへり、妻を離緣し、子を托し、復た京都に出てゝ相國寺に來る。然れども大拙容易に面會を許さず。獨園に命じて、暫らく彼が行狀を見るべしとて、僧堂に居らしむ。而して一ヶ月を經過

するも、大拙に面會するを得ざりければ、洸川頗る、不平に耐えず。往々放屁をなし、暴言を吐き、殆と、市井の無賴兒に異ならず。獨園、時々大拙に告ぐ。大拙、この書生見込みありとて、乃ち面會を許す。洪川、獨園に導かれて、大拙の室に入るや。正面の高坐に、威風嚴然と控へたる一僧を見て、忽ち、顏色を變へ、驚愕狼狽進む能はず。獨園慰めて、之を進めしめんとすれば、病と稱して、中途より堂外に出で、面色さながら青きが如し。大拙笑ふて奥に入る。蓋し嘗て船中における糞坊主なるものは大拙禪師たりしなり。是より、洪川、千辛萬苦、遂に向上の關鎖を打破するを得たり。

森子爵の顏は拵らへもの

鐵舟容貌魁偉、一見人を睨むが如くにして、甚だ近つき易からざる如しと雖も、之に接すれば、溫情暖かなる如く、何人と雖も、其の慈悲深きに感

せざるなし。一日臺閣に於いて、大官列席の中に鐵舟一動議を提出し、縷々說明せんとするや。森有禮傍らより「其は、拙者が承知しておれば差支なきにつき、もう良い、々々」と打ち消したれば、鐵舟忽ち怫然として「未だ拙者の說を聞かずして、其の言の終らざるに先ち、之を打ち消すは甚だ不都合ぢや。拙者が何を言ふか、貴殿承知して居らるゝか。全躰貴殿は、近頃大臣になつたと思ふて、大層勿躰ぶらるると、人は噂するぞ。アノ、顏の恐しいこと……」と打ち込みたれば、森もさるもの、きかぬ氣となり「拙者の顏よりも、貴殿の顏は如何ぢや」と打ち返へしたるに、鐵舟己の顏の恐ろしいは、天然だが、貴殿の顏は態と拵らへた恐しいのだ」と喝破したるに、森も苦笑して、一言も出し得ざりしと。

村田新八繪畫を活す

南洲、村田新八と對坐するの際、南洲突然、床の上に掛けある、寒山、拾得の掛物を指し、彼の二道士は何が話する樣なり。聽き來れと。新八直に立つて其下に至り、歸り來り「彼ら二人は何を話すかと思ふたらば、頻りに、先生と私の惡口をして居たのです。其だから、私が往つたれば、默つて仕舞いました」と。南洲、是より頗る新八を愛し、機密に參せしむるに至れり。

峨山丁稚に平降す

天龍寺峨山、一日木綿服を着け、雲水と同しき風丰して、庭園を散步しけるが、會々主人の伴して參詣しける、十一二歲の丁稚傍らに來り「オイ坊さん、この池の錦魚、一びきぐれないか」峨山頭をふりつゝ「イヤ〳〵叱られるぞや」丁稚すかさず「其んなことを言ふておいて、お前が生臭坊主の親だらう」と。峨山、忽ち無言室に歸り、侍僧に向つて曰はく「流石の峨山も、

今日の、丁稚の挨拶には困つた。何んぼ威張つても、兒共の無我には勝てぬ」と。

鐵舟人の切腹を止めず

山岡鐵舟、人の爲に盡すこと、頗る老婆懇切なりしかば、種々因緣手がゝりを求めて、仕官などの盡力を依頼し來るもの、引きも切らず。一日人あり。亦來つて、仕官の周旋を乞ふこと甚だ烈し。鐵舟乃ち「もう〳〵奉公口の世話燒きなどは、眞つ平御免を蒙ると刎ね付けたれば、其人、赫と急き込み、若し、吾が請を容れられずば、詮方なきにつき、其場にて切腹し了らんと、敦圍きけるに、鐵舟虚然として「ハア、其うですか。其れは仕方がない。併し其處では困るから、稽古場でやつて下さい。總ての準備は及ばずながら盡して進せます」と。三寶に短刀を添へて持ち出し、愈々正式の仕度

に取り懸りたれば、其人乍ち眞ッ青となりて、慄え出し、只管先きの過言の程を謝しけるに、鐵舟「成程、もう切腹はお止しですか。人間と云ふものは、餘り大きなことは、言へぬものですなア」と、冷評したれば、最早坐に耐えず。慚汗赤面の躰にて逃げ去りたり。

其の後、鐵舟に宛てたる、匿名の投書ありて、汝の首を貰ひ受けん云々と、記しありけるに、鐵舟少しも頓着せず。門弟等は、萬一を計り、出入共に警衛せんと乞ひけれども、殺す々々と言ふ者に、殺す腕はないとて、敢て顧みざりき。漸くにして、門弟ら、彼の投書は先に切腹云々のため、自ら耻辱を招きたる某の、仕業なるを探知し、乃ち相謀つて、彼の投書を、一幅の掛物に製し、之を坐敷の正面に掲げ、某を招きて、大に生耻を與へんと騷ぎければ、鐵舟、之を制し、竊かに人をして、金を齎らし、其の人に贈らしめ、匆々、夜逃げせしめたりとぞ。

久我環溪神官を困らす

明治の初年、排佛毀釋の論甚だ盛なりき。時の政府、神佛を合して、大教院なるものを設立し、神官、僧侶より、各々一名づゝの管長を出さしむ。久我環溪、僧侶より出てゝ輪番管長たるの時。神官等、環溪を困らせんとて、竊かに相謀つて、神社等にて祭典を施行するに當り、僧侶の法衣をつけ、珠數を爪ぐるは甚だ見苦し、以來かゝる際には、僧侶と雖も、宜しく烏帽子、直垂をつけ、魚鳥の肉を取扱ふべしと、申込みたるに、環溪究したる躰もなく「其は中々面白い。一躰全躰。僧侶は、人間の死んだのてさえ、取扱ふのだから、魚鳥の肉にさわる位は、何でもない。其替り、神官共が、寺へ來た時は、袈裟や法衣を着せて、頭を、くり〳〵坊主にするから承知して御出で」と。返答したるに、神職共、大に平降し、前議を取り消したりとぞ。

坦山と雲照

原坦山は、洞門の耆宿にして、脫洒自在、其機鋒計るべからざるものあり。一日、眞言宗の高德、釋雲照律師、來つて其室を叩く。時に坦山酒を暖めて、將に盃を擧げんとす。乃ち、杯を雲照に進め「どうです。一杯引つ掛けちやア」雲照本より、戒律嚴なるを以て眉を顰め、手を振り、拒絕すること甚だし。坦山乃ち「こうか酒を飲まぬものは、人間ぢや無い」と獨言しけるを、雲照聞き咎め、葷酒山門に入るべからずとの、佛戒もあるものを、酒飲めぬ我を、何とて、人間にあらずと言ふやと詰問しけるに、坦山、すかさず「左樣だ。酒を飲まなけりや佛樣ヵ」と雲照思はず破顏し、是は一番やられたと。

金剛三昧力

正受老人群狼中の坐禪

傳に曰はく、偉僧白隱が、越の英巖寺にあつて、漆桶を打破するや、意氣軒昂、自ら思ふ、三百年來、吾が如く痛快に受徹するものあるべからず。海内を一掃するに、誰か吾が機鋒に當らんと。英氣勃々、正受老師を尋ねて信の山中に到る。老師乃ち拶して曰はく「無字は什麼生」白隱曰はく「無字何れの處に向つてか手脚を着けん」師乃ち、白隱の鼻頭を捻て「デモ、仰山な手脚の著け樣だ」と白隱是に於て通身汗流れ、一團の所悟盡く消散すと。佛魔共に咬殺する底の、正受老師が面目躍々として見るべし。而して師の菴は、信州の飯山にあり。曾て、舊參の居士等、數輩來つて清話す。時に、夜

深く外面黑し。會々師の起つて厠に赴くや。居士等、耳語して曰はく、試みに、此の老漢を驚殺せしめんと。ひそかに、暗處に匿れて待つ。師の出づるを見て、驀地に胸を捉つて曰はく、是れ何ぞ。師、恬然笑ふて曰はく、吾も亦知らずと。寶永の初年、村民山間に於て、乳狼を捕へ、家に畜ふ。遂に犬の爲に咬殺さる。此より毎夜群狼村落に來り、怒號怨叫、墻を破り、壁を穿ち、多く人子を害す。鄕里爲に大に怖れ、薄暮門を鎖して相戒む。師之を聞き、諸所の墓塲に往き、打坐天明に達すること凡そ七夜、後人に語つて曰はく、群狼相集り、吾が咽喉を嗅き、吾が耳邊を吹く。我是の際に於て正念相續の如何を工夫するなりと。又一時信の山中に青膨脹の妖魔の出づるあり。行人一見すれば、必ず死す。師之を聞いて、從容杖を曳いて至る。薄暮厲果して形を現はす。師の面を瞥見して滅す。後復現せず。

海舟虎列拉の退治

海舟翁嘗て、虎列拉病に冒されしとあり。家人驚愕憂慮して止まず。海舟靜かに之を制して曰はく、虎病我を殺さんとせず、我正に先づ彼を退治せんとて、家人を斥け一室に端坐し、正念工夫遂に大三昧に入つて、盡く虎病を驅除し、漸く快癒に赴くことを得たり。當時詠せし一首の和歌に、

さわぐなよ虎列拉の神の世にあらば、
我まづ討たん身は果つるとも

と其下に自ら劍を採つて、虎病を退治するの圖を畫き鬼髮逆ち目眥裂け、威風凜々、當るべからざるものありと。

法顯と黑獅子

法顯の長安を發して入竺せんとするや。つぶさに辛酸を嘗め、遂に王舍城を去ること、三十餘里に至り一寺を訪ふ。顯それより耆闍崛山に詣てんとす、寺僧諫めて曰はく、路甚だ嶮惡にして加ふるに黑獅子多く行人往々其の毒牙に倒る至るべからず。顯曰はく、吾遠く雲烟を跋渉し異域に來る。元より靈鷲山に到らんと誓ふる故なり。身命固より吝む所にあらず。危難敢て辭せずと。衆止むを得ず、乃ち二僧を遣はして、之を送らしむ。顯既に山に到る頃、日將に暮れんとす。仍て遂に停宿せんと欲す。二僧危懼、之を捨てゝ還る。顯獨り山中に留り、燒香禮拜して、舊跡を巡拜す。夜漸く更け、風色悽愴、萬籟靜まるの時、忽ち三頭の黑獅子あり。來つて顯の前に蹲り、唇を舐り、尾を動かす。顯自若として、經を誦して止まず。獅子乃ち低頭下尾、顯の足前に伏す。顯手を以て之を摩てゝ曰はく、若し我を害せんと欲せば、我が誦呪し終るを待て。然らすんば、便ち退くべしと。獅子、

良々久うして去る。

達磨毒を飲む

達磨、既に釋伽の神髓を得て、直指人心見性成佛の新旗幟を樹て、海に航して支那に來るや。闔國の沙門等、皆其玄義に驚きて、敢て解する能はず。當時支那は只論律を演じ、梵文を譯し、徒らに教學を講說することのみ盛なりければ、忽ち達磨を以て異端となし、奇言を弄するものとし、誹謗山の如く起り、先づ論律の泰斗たる光統律師、流支三藏等起つて非を鳴らし、來つて論議せり。達磨直に相を斥けて躰を指す。而も是非紛然容易に下らず。達磨機を發するや、掣電の如く、動かさること山の如くなりければ、論律者終に瞋恚怒罵して、達磨を撲ち、其前齒を折る。達磨湛然動靜一如たり。彼等褊狹の徒、竟に猜忌嫉妬、自ら堪えず。競ふて害心を起し、鴆毒

を加ふると數度にして而して皆其効を奏せず。達磨、尙乳敎を垂れ、老婆親切法雨を降すと雖も、論律の徒、執着止まず。達磨を殺さずんば止ざらんとし、毆打、悔辱、兇暴、危害、至らざるなきなり。而して、達磨、坦然少しも疑はず。既にして魏に居ること九年、二祖慧可を得て心印を授け了り、將に去て西に還らんとす。而して復六度毒を加へられ、化緣已に去り、端坐して逝く。

名妓鐵眼を挑む

黃蘗の鐵眼禪師は、曾て大阪の瑞龍寺にありて、大藏經の鏤刻を思ひ立ち、自ら托鉢して淨財を集め、漸く將に成らんとするや。會々延寶の大飢饉に遭遇しければ、集むる所の資を散して、四方の究民を救ひ、後復更に淨財を集めけるが、復もや飢饉に遭遇して、貧民救護に散じけれども、銳

意奮勵、百難を排して、遂に大藏經鏤刻の初志を達せしことあり。而して、師が未だ淨財を集むる頃の事とかや。當時大阪の十人組と云ふ役人數輩、同地九郎衞門町の妓樓に遊び、同廓にて全盛ならびなき妓某を招き、戯れて謂へるやう。瑞龍寺の鐵眼和尙は、目下大藏經の鏤刻に大願ありと聞く、さすがに德高く定力固き智識なり。汝容色ならびなしと雖も、和尙の戒行を破らしむるとは能ふまじ。若し能く其戒行を破らしむるを得ば、如何なる恩賞にても取らすべしと。妓は面白き事と思ひ、其は容易きことなり。屹度、仕遂げ申すべしと誓ひけり。扨其後雨細く風寒き夕、妓はわざと憐なる樣して瑞龍寺を訪ね、身の上の哀など語り、强ひて一夜の雨宿りを乞ひければ、和尙も詮方なく宿らしめぬ。されど、夜具の餘りとてあるにも非ず、寒さは寒し。止むなく妓と同衾して臥しぬ。妓は、復なき機會なりと喜び、種々の手管して挑みければ、師は突然衾をぬけ出て、

次の間に立ち、良々久ふするも歸らねば、妓は訝かしく思ひ、潛に覗き見れば、コハそも如何に、和尙は火箸もて、己が要部を燒きつゝあるに、覺えず走り出で、和尙の前に叩頭百拜して、有りし次第を打明け、只管にあやまり入り、即坐に剃髮して尼となり、扨翌日手紙もて、和尙を口說き落したる樣しるし、彼の十人組の役人共に報しければ、首尾如何にと、集り來りけるに、妓は尼の姿となりて出で來り、懺悔の涙を流しつゝ、和尙の境界、俗情の計るべきにあらざるを語り、如此高德の業を助くるこそ、無上の勝因なれと勸めければ、役人共も甚く感に撲たれ、各多分の喜捨をなし、和尙が、藏經鏤刻の大業を補助したりとぞ。

雲居の膽力

雲居禪師は、初め攝津の勝尾寺にあり、仙臺侯伊達忠宗切に之を請じて、

其著提所なる松嶋の瑞嚴寺に住せしめ、遂に中興第一世となす。師の請に應じて、松島に赴くや、途那須野原を過ぐ、會々草賊數黨、路を要し、白刃を閃かして脅迫するに逢ふ。師衆を揮て金を與ふれ共、賊等尚飽かず、其衣帶を奪はんとす。時嚴冬なり。師乃ち地上に端座して曰はく、設例、僧侶の身を以てするも、裸體遠路を行くは、我の能はざる所なり。汝等強いて衣帶を奪はんと欲せば、請ふ我を殺せと。瞑目拱手して動かず。賊等其貫動に感じ、乃ち金を返へし、羅拜して曰はく、我等多年賊を行ふて人を劫掠すと雖も、未だ師の如き、威盛寛大なるの人を見ず。願はくは罪を宥して師の弟子となせと。師遂に其請を容れ率ねて松島に至る。

禪師、瑞嚴寺にあり、毎夜岩洞に往きて坐し、天明に至つて歸る。村中の青年等相語つて曰はく、聞く彼は高德の僧なり。一たび彼の膽を試みんと、一人暗夜に乘じ、師が岩洞に赴くの路に當る、樹上に昇り、師が將に其の下を過ぐるに當り、突然双手を伸ばして、其の圓顱を握む。師皓然として歩を止む。青年試みに兩掌を離てば、師復從容として歩み去る。後日青年等師に問ふて曰はく、師頃日怪を見ざるかと。師曰はく、敢て怪を見ず。只數日前の夜、樹上より、手が頭を握む者あり、されど其の掌の暖かきを以て、青年輩の惡戲なるを知り、敢て爭はざりしのみと。

異禪師赤痢を殺す

蒙山の異禪師、年三十にして、初めて禪門向上の事を聞き、四方の師に參して工夫をなす。年三十二に至るまで發明なし。後、鼓山に至り、開山禪師に參す。開山無字の公案を看せしめ、且つ工夫をなすの要を數へて曰はく、晝夜箇の無字に參ずること、猫の鼠を捕へんとする如く、鷄の卵を抱くが如く、間斷ある可からず。或は鼠の棺木を咬むが如く移易すべから

ず。若し如此工夫を怠らずんば、必ず發明の時あらんと。師是に於て關山の言に從ひ、孜々として怠らず。十八日を經て、茶を飲んとするに當り、忽然として「世尊花を拈じ、伽葉微笑す」の話を了得す。歡喜して三四の長老に證を求むるに、皆一語なし。或は曰はく、只海印三昧を以て一印に印定し去れと。師此の言を聽いて二年を過ぐ。而して、未僧たらず。景定五年六月、四川の重慶府にありて、痢を病む。晝夜百回、已に死に近し、口言ふ能はず、身動く能はず、海印三昧も亦用ゆるを得ず。從前の所得會了、總て寸毫の効なし、畏怖交々迫り、衆苦止む時なし。乃ち強いて氣を勵まし、高く蒲團に坐し一爐の香を裝ふて、三寶龍天に祈り、從前の諸惡業を懺悔して而して曰はく、若し命終らば、願はくは、般若の力を以て因緣あるの所に生れ、早々に出家せん、若し病癒ゆるを得ば、直に俗を棄て僧となり、早く悟明を得て、後人を濟度せんと。願終つて箇の無字を提起し、正念工夫、生

死を顧みず。良々久ふして臟腑鳴動すること三四回なり。然れども、敢て其苦を顧みず。既にして、眼皮動かざるに至り、又竟に、身あるを知らず。只無字綿々として絶えず、晩に至りて、漸く坐より起てば、病退くこと一半なり。復三更の四點に至るまで坐して、病苦盡く退き、心身輕安なるに至ると云ふ。

瞋る禪と笑ふ禪

東坡曰はく、契嵩禪師は常に瞋る、人其笑ふを見ず。海月慧辨師は常に笑ふ。人其の瞋るを見ず。予錢塘に在りて、二人を見る、而して、二人共に趺坐して逝く。契嵩の遺骸、之を荼毘に附して、火壞す能はず。薪を增して終に壞せざるもの五あり。海月死して、面生けるが如く、且つ微笑を含む。此の二人のものは、即ち瞋笑を以て、佛事をなせしなりと。

美人に動かず

東皐心越禪師は、明人なり。延寶丁巳の年、長崎に來る。水戸中納言光圀、之を迎へて、壽昌山祇園寺を創設し、請じて開山第一世となす。須臾にして、四方の雲衲其の風を望んで來り集るもの、實に一万七千人なりと云ふ。光圀、師の祖先は、蜀の名將關雲長に出づるを聞き、名家の苗胤を我國に遺さんと圖り、容色艶美の一小女をして、常に師の傍らに侍らしむ。而して、師は少しも心を動かさざりければ、光圀其の德に感じ、此事を止めしと云ふ。

白隱怒濤の中に眠る

白隱禪師、將に東に歸らんとして、兵庫より船に搭ず。會々月明に乘じ、船

中皆月を樂んで談笑すれども、師は獨り行李を卸して、横臥するのみ。既にして、一睡目を醒ませば、船は錨を下して港頭にあり。師問ふて曰はく、何ぞ船を發せざると。舟夫叱して曰はく「此の寐ぼけ坊。昨夜の暴風雨にて、相前後して出帆せし船十數艘、皆沈沒せり。此の船亦、怒濤激浪に浚はれて、已に殆んど覆沒せんとせしもの幾回なるを知らず。船中皆神佛に祈り、吾等亦髮を斷つて、漸く万死の中に一生を得たり。然るに汝只獨り、安然として鼾聲鼾々たり。我れ多年、海上に從事すと雖も、未だ汝の如き、馬鹿膽の据わりしものあるを見ずと。

道灌亂刃の下に詠ず

太田道灌は、文武兼備の良將なり。初め龍穩寺の泰叟禪師に參じ、禪要を問ふ。師授くるに、瑞岩主人公の話を以てす。道灌之を工夫すること、殆ん

ど二年にして省得なし。一日越生に遊び、途に旅客と同伴し、往々々々語り且つ問ふ、曰はく、子は何處の人ぞ。客曰はく、京都なり。道濬曰はく、彼の地の山川當國と比して如何。客曰はく、唯鐘聲あるのみにして異なるなしと。道濬計らず言下に大悟す。馳せ歸つて、泰叟禪師の室に入り所悟を呈す。師問ふて曰はく、即今、主人公何れの處にあるかと。道濬曰はく、山は月樓の鐘に答ふと。師乃ち之を印可す。後其の主上杉定正の邸に至る。定正、道濬をして入浴せしめ、武夫十數人に命じ、各々刀槍を採つて其の不意を取り圍み、迫らしめて曰はく、汝平日和歌を好む、是の時如何と。道濬從容迫らず、

かゝる時さこそ命の惜しからめ
かねてなき身とやもひ知らずば

と吟じ了つて自若たり。

將軍義政、一頭の猿を養ひ、人ある毎に、飛びかゝらしめて以て興ず。道濬の來るを見て、復侍臣をして之を試ましむ。而して、猿道濬を見て、平伏號泣して止まざりしと云ふ。

極致達道

圓朝と鐵舟

三遊亭圓朝曾て山岡鐵舟に見えし時、鐵舟突然問ふて曰はく、汝落語において は、日本一なりと聞く、抑も何を以て如斯巧者に語り得るかと。圓朝答へて曰はく、我此の三寸の舌頭を揮へば、如何なる無趣味の事情と雖も、聽者をして能く三嘆たらしむを得べしと。鐵舟曰はく、さらば、更に問はん、汝もし、其の舌の根を切り去つて、尚能く巧妙の落語をなし得るかと。圓朝曰はく、我只此の舌一枚を以て、家業の道具となすのみ。此なくれば、如何ともする能はずと。鐵舟こゝに於て、大に笑ふて曰はく、抜刀は、聞きし程になき圓朝の落語かな。舌なくんば、語り能はずとは、平凡な

る落語家の言のみと。圓朝、深く其言に疑義し、遂に禪に參じて得る所あり。後無舌居士と號す。今圓朝が、曾て自ら語りし、經歷談一節を掲げん。

「某の年、山岡先生に面謁したる時、先生、突然として、圓朝子の落語は、日本一なりと聞く、只今此の席にて一つ、語り呉れずやと云はる。如何なることを語り申すべきかと問へば、桃太郎の話が良いと言はる。甚だ奇妙なる依頼なれば、あの子供に聽かせる、桃太郎の話に候がと重ねて問へば、左樣々々、あれなり。實に面白き話なり。どうか、あれを一つ、聽かせ呉れよと迫らる。餘りのことに、暫し茫然として呆れ居れば、先生重ねて言はる、樣、幼き時、母に添寢して、あの話を聽けば、とろ〳〵と眠るが如く其の快味今も忘れ難し、落語の下手なる、母がしてさへ彼の如し、日本一の貴公が語らば、嘸かしと思はる。イザ、語り呉れよと迫られ、尚更ら茫然として、默し居れば、先生忽ち斷乎聲を放つて、桃太郎のお話すら出來ぬとす

れば、大の話下手なり。日本一何處にあるか。と叱せられり。

奇警なる先生の言に感激して、其後種々に工夫し、一の「新桃太郎」なる腹案を作り、至つて憶病なる桃太郎が、恐ろしがりて鬼ケ島を征伐に得行かぬと云ふ筋に拵らへ、機會もあらば、滔々語り申さんと、持ち構へたる折しも、或る所にて、先生に出逢ひたれば、今日こそと思ひ、先生、桃太郎を一つ話しませうかと問へば「今日は聞きたく無い」と喝せられたり。是より、自ら警醒し、色々と工夫惨憺して、或る秘密を考へ居る折柄、三三の友人中、已に鐵舟先生に參じて、少しく出來たるがありて、度々尋ね來り、問ひかくるに、頗る窮し、晝夜寄席の往き還りの車上にて、苦心工夫して、殆ど三年の間を過したり。

或日、天龍寺滴水禪師の參られし時、其の席に招かれ、彼の友人共と同伴して參れば、山岡先生復もや私を困らせ今日は一つ舌を結び口を開かずして話せと言ひ出され、人々を促し、私を席の眞中に押し出されたり。汗流れ、進退殆んど谷りたれど多年の工夫にて、聊か得る所もありしを以て、一席語り了りしに、誠に良しと嘆賞せられ、されど、吾等にては十分に分らず幸ひに、滴水禪師のお出なれば、師に批評を乞ふべしと言はれ又復禪師の前にて、試みしに眞に了したりと云はれたり。

勝海舟の談話

西郷南洲と肝膽相照し、江戸百萬の生靈を救ひ、徳川の家をして全からしめ、維新の大業を無事に成さしめたる、勝海舟が當年の器局は、盡く禪により、て、錬鍛し來れるものなりとぞ。其の逸話に曰はく。

彼の島田虎之助と云ふ先生が、劍術の奥意を極めるには、先づ禪學を始めよと勧めたそれで、たしか十九か、二十の時であつた、牛島の廣徳寺と

いふ寺に行つて、禪學を始めた。

大勢の坊主と、禪堂に坐禪を組んでゐると、和尚が棒を持つて來て、不意に坐禪してゐる者の、肩を叩く、すると、片端から仰向に顛れる、なに皆が座して居るも、錢の事やら、女の事やら、甘い物の事やら、色々の事を考へて、心が何處にか飛んでしまつて居る。そこを叩かれるから喫驚してころげるのだ、あれなんかも、始めは此、ひつくり返る連中であつたが、段々修業がつむと、少しも驚かなくなつた例の如く肩を叩かれても、只僅かに目を開いて視る位の處に達したからして、殆ど四年間、眞面目に修業した。此の坐禪と劍術とが老爺の土臺となつて、後年大層爲めになつた。瓦解の時分、万死の境を出入して、終に一生を全ふしたのは、全く此の二つの功であつた。或時分澤山刺客やなんかにひやかされたが、何時も手取りにした。此の勇氣と膽力とは、必竟此二つに養はれたのだ。危難に際會

して、逃れられぬ場合と見たら、先づ身命を捨てゝかゝつた。而して不思議にも、一度も死なゝかつた、こゝに精神上の一大作用が存するのだ。人一たび勝たんとするに急なる、忽ち頭熱し、胸跳り、措置却て顛倒し、進退度を失するの患を免れるとは出來ない。若或は遁れて、防禦の地に立たんと欲す、忽ち退縮の氣を生じ來りて、相手に乘ぜられる事、大小となく、此の規則に支配せられるのだ。あれは、此人間精神上の作用を悟了して、何時も先づ勝敗の念を度外に置き、虛心坦懷事變に處したそれて、小にして刺客亂暴人の厄を免れ、大にして瓦解前後の難局に所して、綽々餘地を有つた是れ畢竟劍術と禪學の二道より、得來つた賜であつた。

こゝに、一の面白い話がある。白隱と云ふ一人の禪僧があつた。其の內の娘の聖僧である。此和尚の寺の門前に、一軒の豆腐屋があつた。是は、近代が、不圖妊娠した。兩親は大に驚き、詰責すると、娘が實はお寺の上人さん

と云云した妊んだと白状した。そして兩親は大に喜び、お上人樣のお胤であるならとて、產み落させ、大切に育て上げた。二三年たつと、彼の娘が、實にすまないと考へ付て、實を吐いた。そして其の子供が白隱の胤でないと云ふことが分つた故に、兩親も大に驚き、寺に至り、白隱に向ひ、前後の始末を話し、大にあやまつたすると、白隱は『ハアソーカ』と一言いつたばかりであつた『ハアソーカ』中々大きなものだ。天下の事凡て春風の面を拂つて去る如き心胸此の度胸あつて、始めて天下の大局に當ることが出來る。

西郷は、流石に此間の消息を解して居た。江戸城受渡の時、一つの美談がある。是は一翁大久保から、聞いた話だ。あの時には、おれと西郷との談判で、双方五人宛の委員を選び、城受渡の式をすることにした。西郷も一翁も、其一人で、おれは加はらなかつた。其時は、殺氣全都に充滿すると云ふ形勢

で、中々油斷が出來なかつた。それで、城受渡に來る官軍の委員等も非常の警戒で、堂々たる官軍の全權委員の一人が、猿猴の餘り、片足に草履を穿ちながら、玄關を昇つたと云ふ奇談もめつて居る位である。此の中に、西郷は優然として少しも平生に異ならず、實に貫目があつたと云ふ。實に驚いたは、城受渡に關する色々の式が始まると、西郷先生居睡りを始めた。此の式がすんで、外の委員が引取るも猶先生ふらりふらりと遣つて居るずると一翁傍らよりたまりかね、西郷さん〳〵、式がすんで、皆さんお歸りて御座ると、ゆり起すと、先生、ハアーと言つて、ねとぼけ顏を撫でつゝ、悠然として歸つて行つたそうだ。一翁も、ひどく感心して居た。中々ふとい奴だ。數十日間疲れて居たもんだから、城受渡しの間に、貰い眼見附た氣で、居睡りとは恐れ入るではないか。必竟こゝ等が渠の、維新元勳の肇頭に數へらるゝ所だ。

正受菴主の劍術

正受老人は、信州飯山の、松平遠州侯の庶子、至道無難禪師手度の弟子にして、近世有名の偉傑、白隱禪師を其門より打出したる老手、眞に絕代の雄物なりしなり。一日武夫あり來り謁して云はく、少より擊劍を好み、精錬二十年、諸家の奥義を究め、近ころ、一家の秘訣を得んと欲す。苦吟數月、百端を究むと雖も、未だ其妙を極むる能はず。師豈方便なからんやと。師足つて双拳を握り、打つこと三下にして一蹈に蹈倒す。武夫、豁然として省あり。爾來、伎大に進むと云ふ。是に於て鄉黨の武夫、十數輩師に就いて道を問ふ。一日師を請じて茶を獻じ、茶後各木劍を操り相戰ふ。師をして、精粗を點檢せしむ。武夫等師に謂て曰く、理に於ては、吾輩固より師に及はず。然れども、事に於ては、師亦吾輩に及はずと。師曰はく、汝等我を打たんと欲せば、即ち打つに任す。只恐らくは、老僧に向つて、打つを得まじと。夫等相顧みて曰く、吾輩師を打つ、豈其れ難からんや。師試みに、一刀子を與へんか。師云はく、諾、夫云はく、請ふ師も亦刀子を採れ。師云はく、予は是佛子、何ぞ刀子を用ゐん、者個可なりと。小圓扇を持ちて曰はく、汝試みに打ち看よ。若し機かに、我を打着せば、汝を許して、甚た妙手とせんと。夫乃ち聲を發して、而して向ふ。千變万化其伎を盡して而も、木刀の觸るゝ所但團扇のみ。遂に師を打つと能はず。悔謝して去る。後僧あり師に問ふて曰はく、悟道の事は且らく置く、何等の事を學べば、以て擊劍の妙を得べきか。師云はく、正眼明白豈劍術を云はんや。汝わづかに名を聞いて、早く異了するなり。劍路分明途に當て途を打つ。もし能く此の如くんば、萬に一を失せずと。

力士大浪

高津柏樹翁、明治のはじめ、黄蘗山の知客寮に在勤のをり、本山の使僧となりて、九州に下らむとし、留守には、此山和尚を請じおかむためにそが自坊なる、讃岐國波止濱圓藏寺を訪ひて、此山和尚及び、檀徒に之を談じ、日々九州へ航する便船のあるを待ちき。時にたま〳〵、波止濱より程遠からぬ今治藩に、藩侯抱への、横綱大關陣幕久五郎一行の相撲ありて、その土俵入りの評判高かりければ檀徒ら、翁がつれ〳〵を慰めむとて誘ひぬ。この日はじめて大浪を見たり。その年の頃は未だ三十に滿たず、骨格たくましき偉丈夫にして、誰が目にも五六十目より上の力士と見え、決して田舍相撲の褌かつぎにあらず。この日も弓振の役をつとめて、大に喝采を得たりきといふ。

今治の興行を打上げてのち、大浪らは、波止濱圓藏寺に來り寓し、陰暦の十二月より年明まで寒稽古をはじめぬ。すなはち、檀徒らまた翁を饗應する爲めに、夜ごとに大浪らをして「相撲甚句」を躍らしめて興を添へたり。あるとき年寄にやあらむ、翁に語りけるは、和尚樣の見たまふごとく、大浪は軀幹太く膂力も人にまさりて強けれども、惜むらくは氣性弱くして、師匠、兄弟子などには勝ちがたきものと諦め居るには困じ果てぬ。何か善き方便もて教へたまへかしと、切に請はれしかば、翁は打ち笑ひ、大浪に向ひて貴樣の名は大浪ではないか、役に立たぬ、坐禪して強くなれと笑談半分に云はれしに愚直なる力士大浪は、和尚樣、キツト勝てますかと問ひければ、翁はこゝぞと思ひ、キツト勝てるぞ坐禪を爲せ、ドウデモイーから本堂で安坐をかいて考へろと答へ、力士は本堂へ行く、翁は他の客と話し其夜は大浪の事を忘れて主客各々眠に就けり。さて翌

日の夜となり、其日の評判を聞けば力士大浪は實に大浪となれり。昨日とは全く人を異にし、前頭も取つて投げたり。小結も投げたり。關脇も投げたり。田舍なれども大關は大關なるに、美事に取つて投げたり。大浪の評判盛となり翁は大悅壺に入り、大浪々々、坐禪せしは如何候やと言せはしく問ひければ、大浪は滿面に喜色を湛へ、お悅び下されまし、昨夜本堂の柱に倚りかゝり考がへましたが、何にも思ひつくとは有りませず、眠むくなるのみふいと、手を腰の煙草入れに突き込みましたら、錏錢が指にさはりました、それから考へました、錏錢は一文にしか通用せぬものでも、錢は錢に違ひなく、錏錢がなくつては世の中の人がこまる。私も錏錢のやうな者ですが、ヤツパリ、世の中になければならない者と考がへ出しました。さうなりますと、錏錢ばかりが心の中に考へられ、段々と錏錢が一文二文と長くなり、終に山も川も錏錢となれり。世界中が丸て

錏錢となりました。それから、私の名は大浪と云ふから、浪と云ふことを考がへ初めましたら、段々と考がへが浪ばかりとなり、本堂も浪、多度津も浪、四國も浪となり、私は大浪となつてしまいました。其れから急に強くなり、夜が明けると太皷が聞える、小屋へ入る勝負となる、私の眼にも心にも、浪の外はありません。大浪で荒れて荒れて、誰でも彼れでも、打ち倒さうと思ふばかりでしたと。笑ひつゝ、其日の大勝利を語り出でたりとぞ。

鐵舟の無刀流

近世俗人にして、大悟徹底、以て宗門の印可證明を得たるもの、獨り山岡鐵舟あるのみ。維新鼎沸の際、西鄕吉之助ら官軍を率ゐて、將に江戸に亂入せんとするや。鐵舟幕府の使臣として其陣營に到り、快辯壯議遂に西

郷をして屈せしむ。西郷乃ち、其脊を叩いて曰はく「好漢」と。以て磊落の偉丈夫なるを知るべし。

鐵舟少にして、淺利義明の門に入りて劍を學び、劍道の奥妙に達せんとは、禪を修むるの最も稗益あるを聞き、乃ち奮つて心を禪門に寄す。一日、故の天龍寺派管長由利滴水禪師に參じ、話頭たま〳〵劍道の事に及ぶや、師乃ち洞山五位の頌を提げ、兼中到、兩刃交鋒不須避。好手却同火裡蓮。宛然自有衝天氣。と云ふの句を授く。鐵舟宅に歸りて工夫慘憺たると三年、或は深夜忽然と起き直りて蒲團上に兀坐し、或は驀地に煙管を拈して凝視し、殆と狂人に似たり。夫人憂慮之を滴水禪師に告ぐ、師笑ふて曰はく、捨て置けと、一日計らすして豁然大悟す。鐵舟乃ち車を飛ばして禪師を訪ふ相見て一語なし、只呵々大笑するのみ。更に劍道の師、淺利を訪ふて劍技を試むるに、淺利竹刀を拋ち、子の技已に達せりとて、悉く

刀齋の所傳無想劍の奥義を擧げて之を授く。鐵舟これより精究して、遂に無刀流の一派を開く。

故の龍手田安定男は頗る劍を好み鐵舟に隨ふ年あり。嘗て曰はく、鐵舟の劍法は其由來甚た遠し、豈容易に學んで至るべけんや。彼が竹刀を揮ふや初は五本あれとも中ごろ一本となり、終に無刀となれりと。男が、良二千石として滋賀島根に赴任せんとするや。鐵舟を叩いて、施政の要を問ふ。鐵舟一語治政の事に及はず、只劍法の奥義を以て之に授く。

鐵舟、又嘗て人に語りて曰はく、他人は劍術を鬪はして、漸く疲勞を感ずと云ふ、予は之を久ふする毎に、輙ち益々神身の壯快となるを覺ゆるのみと。其大患を抱いて、將に瞑せんとするや。沐浴淨衣、端坐して親族故舊を顧み、吾將に逝かんと。訣別の語を述べ、從容として脫す。

澤菴と柳生但馬守

宿澤庵が、一代の英霊なりしとは、世人の既に知る所なり。其未だ聞えざりし時、弊衣破笠、當時天下に名高き劍客、柳生但馬守宗矩の邸に至り面會を求めけるに、家臣甚だ之を賤み取次ぎを拒みけり。澤菴頑として退かず、強いて面會を求め、宗矩と一太刀試合たき旨申し込みたりされど、宗矩は當時、將軍の師範役として、劍道に於ては天下に敵なしと思ひつるに、僧の身分として、吾と、試合を要求するを嗚呼ケましけれいて、一擊の下に粉砕し呉れんと、道場に導かせ、已む用意して道場に入り、いざ立ち合はんとするに、澤菴少しも騒かず、徐ろに宗矩に問ふて曰はく「聞くに、足下劍法に於ては海内敵なしと。今もし、二人同時に足下に向つて斫りかゝらば如何」宗矩曰はく「斫りまくらんのみ」澤菴更に問ふ「四人同時

に斫りかゝらば如何」宗矩「斫りまくらんのみ」と、斯くの如く、澤菴問ふ毎に其數を倍加して、終に百人二百人の衆敵を以て問ひかけたるに、宗矩面倒とや思ひけん、聊聲一番「斫りぬけて去らんのみ」と、澤菴聲に應じて呵々大聲「扨々聞きし程にもなき柳生殿の劍法かな。一人二人は斫りまくるも、百人二百人となれば斫りぬけ兼ね去らんとは卑怯至極、手は敢て劍法を學はざれども、何万人攻め寄せて一時に取り圍むとも、ぬけ去らんなどの臆病の念は少しも起さず。蹈み止まつて之を斫りまくらんは掌上の塵を拂ふが如し」と、宗矩稍、疑議して「其ほど如何なる劍を以て克く然るか」澤菴「趙州の露刃劍と云ふものなり」宗矩「趙州の露刃劍とは如何なる劍なるか」澤菴「足下此の劍を知らんと欲せば、須らく此の一句を參すべし」とて、

心とは如何なるものをいふやらん

墨繪に書きし松風のおと

と、一首の和歌を示しける。宗矩是において發憤し、澤菴について深く工夫三昧の妙を得、遂に劍法の奥妙に達せり。或時將軍家光、宗矩に問ふて曰はく「汝か劍法眞に無敵なり。天下又恐るゝ者ありや、否や」宗矩答へて曰はく「劍道に於ては恐るゝに足るものなし。されど、只禪僧の恐るべきを知る」家光曰はく「其は誰ぞ」宗矩曰はく「僧澤菴なり」と大に其の法器を賞揚す。家光乃ち命じて澤菴を招かしむ。時に澤菴事に罪せられて羽州にありしかば、乃ち使をつかはして請せしめけれど、澤菴狂句を詠して謝して曰はく、

御召しなら歸り澤菴思へども

御江戸ときけばむさしきたなし

佛頂と芭蕉

芭蕉は近代の詩聖なり。初め深川長慶寺の、佛頂禪師に參じて省得あり後竟に、其印證を受く。師一日、六祖五兵衞を伴ひて芭蕉の菴を訪ふ五兵衞先づ入りて問ふて曰はく「如何か是れ閑庭草木中の佛法」と芭蕉答へて曰はく「葉裏々葉表々芭蕉かな」師乃ち入つて問ふ「近日何の得る所ぞ」と芭蕉曰はく「雨過ぎて青苔を洗ふ」と、師更に問ふ「如何なるか是れ青苔未生前春雨未來前の佛法」と、折柄蛙飛んで庭前の池中に入る芭蕉乃ち「古池や蛙飛ひ込む水の音と答ふ。師大に喜び携ふる所の如意を授け、且つ筆を採つて「本分無相、我是什麼物、若未會、爲汝等諸人下一句、子、看々、一心法界、法界一心」と書す。

千の利休

不世出の英雄、豐臣秀吉、千の利休を召して茶道を問ふ。利休答へて曰はく、茶は禪と同じく、膽力を錬るものなりと。豐公其の言に感じ、早速茶を立てしむ。利休乃ち起つて襖を押し開き、茶器を持ち出さんとする一刹那、豐公大身の槍をしごきて、其の穗先を、利休の鼻先に突きつけたり。利休、此の時、神色自若として瞬きもせず、徐ろに茶を立て終はりけり。豐公、此に於て心を茶道に傾け、利休に師事して、其の道を尋ね、朝夕傍らを離れしめず、軍中と雖之を携ふ。利休亦軍に從ふ毎に、甲冑を着け、一兵士として自ら任ず。小田原の役、薩摩の役皆軍に從ふて英雄の閑日月を養ふと云ふ。

橋本雅邦の話

橋伯橋本雅邦、曾て或人に語つて曰はく。

『美術學校の生徒に、川上某と云ふものがある。此の男は性質甚だ素朴であつて衣服や容貌に一向頓着せず、所謂弊衣蓬頭で、傍ら禪を好み、徒々異夜中頃、東叡山の頂に坐わつて工夫して居た。處が、晝と來たら非常の下手糞で、もう、三年生になつても、拙くて〳〵迚も見込がないので、敎員共も、此の男ばかりは捨て〳〵顧みないのであつた。或日、予は生徒に向つて、晝論を說く中に晝と禪との關係を切論したのだ。處が彼は禪と晝との一致について大層感じ入り、其からと云ふものは、非常の進歩をして、丸で別人の樣で、極無邪氣な不用意な所に言ふ可らざる眞美が備つて來た。竟畢此は初めは只良う描かうと云ふことに心を使つて、所謂技術

の末技にばかり齷齪したのだから、齷ら焦心しても駄目であつたのだ。が、後には只己の心ぐちを其まゝ寫し出したから、竟に自然に合したのだ』

茶道の開祖

僧珠光なる者あり。紫野大德寺の一休禪師に參じ、禪を修めんとするに、能く睡るの癖ありて、修行純一ならず。自ら亦其の癖を矯めんとして克はず。或人の敎により梅尾より茶を取り寄せて、之を喫するに初めて克く睡魔を退くるを得。珠光是より好んで茶を喫し、遂に茶道の開祖たるに至る。曾て入室の序、禪師茶をたてゝ珠光に與ふ。珠光半ば喫し了りし時、師突如として問ふて曰はく「珠光茶の味は如何」と、珠光茶碗を手にしたるまゝ、憮然として答ふる能はず。師乃ち如意を採つて、一擊茶碗を粉

碎にす。珠光思はず省發し、禮拜起つて將に去らんとす。其の門を出て去らんとするに當り、師復、喚んで曰はく「珠光」と、珠光思はず首を回らす。師曰はく「茶の味は如何」珠光曰はく「柳は綠花は紅の眞面目」と。

高橋泥舟の苦心

高橋泥舟は、勝海舟、山岡鐵舟と並び稱して、幕末の三舟と呼はれたる程の名士なりされ共、壯年の頃は頗る傲慢の性質にて、槍にては天下に敵なしなど、自負の念を抱き、一日、上野處靜院の住職に面會したる時、寒暑の挨拶終るや否や、直に槍術の自慢話に移りければ、住職も奇異の面持ちして、其の顏を見詰め居たるが、靜かに聽き了つて「ハヽア貴殿自ら槍の名人と言はるゝか、幷は甚だ面白し、思僧も聊か其の心掛けあれば、御相手して、貴殿の手練の程を拜見せん」と言ふに、泥舟早速用意をなし、

物干竿をとつて立ち向へば住職は唯悄然として、一本の古箸を握りたるまゝ立ち上り「サア何處よりなりとも突け」と言ふに、泥舟、這は己を蔑視したるものなりと、心中大に怒を含み、只一と突きと急れども、寸分の間隙もなきに如何ともする能はず。汗流れ氣屈して、竟に槍を投げ出し、茲に傲慢の角を折つて、住職を拜し、扨言へる樣「貴僧の手の内、中々某の及ぶ處にあらず。只今の御身構は何と云ふ形なるか」と問ひけるに、住職微笑して「敢て名づくる程の形にもあらず。強いて名づけなば、山は高く水は長しとか、或は横目縱鼻、或は柳綠花紅と、何れを名づくるも可ならん」と。泥舟其意を解する能はず、更に教授を乞へば、一時間を限りて、山は高く水は長してふ語を考究せよと答ふるのみ。泥舟大に究し、竟に七日を期して、歸宅せしかとも、只山は高く水は長きのみにして、此の外何の所證もなし、期日も來りければ、再び處靜院に至り、思考の就かざるを有

躰に白狀しければ、住職一笑しながら「色々考へるべしだ。モ一つ、火も亦涼しと云ふ語もあれば、此等も亦考究すべし」と、山高水長の語未だ明ならざるに、火も亦涼しの難題出て來りて、泥舟ほと〳〵困じ果てけれども、槍術の奥妙を極めたしとの一念に驅られ種々工夫すること五六年なりしが、一日「龍門夜話」を讀んで、快川禪師が、末後の偈に、滅却心頭。火亦涼。の句に至り、聊か歡喜を得たり。是より益々發憤して、遂に大悟を得るに至りたりと云ふ。

活商量

清涼殿中の問答

後醍醐帝の時、八宗競ひ起つて禪宗を排斥し、屢々闕に至りて之を訴ふ。元享四年正月二十一日、南都の諸僧を召し、清涼殿において問答せしむ。鏡圓（南禪第八世大光國師）及ひ其の法弟宗峯（大燈國師）選はれて禪將となる。時に鏡圓會々病あり。然れども、事頗る重大なるを以て、病を勉めて殿に上る。百官公卿列を正して傾聽す。鏡圓奏して曰はく、今聖上に對して宗旨を商量す、須らく直問直答繁辭を借らざるべし。若し敗を取るものは、宜しく降つて互に弟子とならんと。法印玄慧出てて問ふ「如何なるか是れ教外別傳の禪」宗峯曰はく「八角の磨盤空裡に走る」と、玄慧玄旨を

解せず。園城の僧匠函を持ち出づ、宗峰問ふて曰はく「是れ何ぞ」僧匠曰はく「是はこれ乾坤の函」と、宗峰乃ち竹篦を以て函を粉粹して曰はく「乾坤打破の時如何」と、僧匠忙然として究す。虎聖乃ち帝に奏して曰はく、昔嵯峨帝の時、八宗論戰して七晝夜に渉る。今僅に、一問一答を以て了るべからずと。帝是を許す、是に於て諸僧交々起つて難問を發する事蜂の如し、鏡圓無聖の辯を以て之を挫く、第七日に至り、起つて問ふ「如何なるか是れ禪師」鏡圓曰はく「箭已に弦をはなれて返回の勢なし」虎聖曰はく「吾が宗も亦此の如し」鏡圓乃ち扇子を竪つて曰はく「汝試に射よ看ん」と、虎聖曰はく「中れり」鏡圓扇子を袖にして曰はく「更に射よ看ん」虎聖曰はく「矢已に盡きぬ」鏡圓曰はく「吾が宗を知らんと欲せば白雲万里」と、虎聖曰はく「禪得て聽くべきか」鏡圓曰はく「近づき來れ」虎聖直に前進す、鏡圓乃ち一陷に陷倒す。聖覺えず起つて禮拜す。是に於て諸僧盡く弟子の禮を取

る。

丹霞木佛を燒く

丹霞和尚「曾て慧林寺にある時、天大に雪降つて寒甚し。乃ち木佛を燒いて、己が尻を暖む。寺僧詰つて曰はく、何ぞ木佛を焚くかと。和尚乃ち杖を以て灰を掻きまはし、曰はく、我舍利を得んとす。寺僧曰はく、木佛焉んぞ舍利を得ん。和尚曰はく、舍利を得ずんば、更に他の木佛を燒かんと。

東坡妓を携ふ

大通禪師は、戒律頗る固き高潔の師なり。人の之に參ずある毎に、輒ち齋戒沐浴して面す。一日東坡、妓女を携へて謁す。大通乃ち眉を顰む。東坡、妓をして歌はしめて曰はく、「師唱誰家曲、宗風副阿誰、借君拍板與門槌、我也

逢場作戲莫相疑、溪女方偷眼、山僧莫睫眉、却愁彌勒下生遲、不見老婆三五少年時」と、大通思はず大笑す。東坡曰はく、我今日初めて、大通の禪を看破せりと。

惠春尼の洒落

攝所菴惠春尼は、相州小田原の最乘寺開祖了菴禪師の實妹にして、姿色衆に勝れて美なり。曾て行脚の折柄、鎌倉建長寺に至り、某智識に面會を求めげるに、一雲水出で來て取次をなし、尼を導いて方丈に至るの途次、雲水忽ち活作略を用ゐ、突然後を振り向きながら、前を捲くり上げ、堅きこと金剛の如き一物を出して「我が一物の長さ三尺」と迫りたるに尼もさるもの、何かは猶豫すべき、直に亦己が前を捲くり上げながら「尼が一物の深さ無數量」と答へて洒然たるを、智識遙かに此の樣を眺め、窃かに舌

を巻いて嗟嘆し、親しく參禪の要を語りとぞ。

滴水の自由黨論

河野廣中、嘗て天龍寺林丘院に至りて、滴水禪師を訪ひ、親しく參禪の要訣を訪ねければ、師は直に答へて「聞く、子は自由黨の錚々たるものなりと。然も子は自由の意味を解するや、抑も自由黨の隊長は誰なるやを知るや、否や。即ち、世尊釋迦牟尼佛にあらずや。何となれば、其無碍自在なるを以て然か云ふなり。子もし其の自由黨たらんと欲せば、乾坤只一人と云ふ事を會すべし。乾坤唯一人と云ふの境に至るを得ば、我子に自由黨員たるの名を許さん、其れ、或は然らずんば未だ自由黨たりと云ふべからず」云々と、廣中案に相違し、忙然として辭し去る。

聖一國師と菅爲長

東福寺の開祖、聖一國師一日、藤原實經の邸において、菅原爲長に見ゆ。爲長は一代の鴻儒にして、盛名朝野に嘖々たり。而して甚だ佛を排し、菅て國師の令聞に銜む所あるを以て、好機逸すべからずとし、極力佛敎を論難し、師を面折せんとす。師從容答へて曰はく、我が法は、佛々祖々相傳へて、一毫も亂れず、直指面授にあらざれば皆虛設なり。我は釋迦より五十五世達摩より二十七世なり。知らず、子は孔子より幾世に當るかと。爲長事の意表に出でたるを以て、俄に答ふる克はず。唯默々として去る。

馬の圖

昔人あり。其の珍重する所の馬の圖を懷にし、一休の菴を叩きて贊を乞

ふ。一休乃ち筆を採つて書して曰はく、「馬ぢやさうな」と、其の人稍々悦ばざるの色あり、其の後道如亦之に贊して曰はく、さうぢやさうな」と、或人評して曰はく、是れ稀世の逸品たるを失はず。何となれば、已に天下知名の高德二人の保證を以て、眞の馬の圖たるを證據立てたればなりと。維新の際一時名聲を四方に馳せたる京都建仁寺の鄧林之に擬して一幅の馬を圖を書す。自ら其上に贊して「一休曰はく、馬ぢやさうな、蓮如曰はくさうぢやさうな」と。明治二十八年十一月二十八日京都相國寺に於て、故の獨園禪師の法營を擧ぐるに當り、來り會ずるもの、皆是れ一代の龍象のみにして、而して一の諷經もせず、一の拈香もせず、唯若の鄧林の畫きし馬の圖一枚を出し、鳥尾得庵先づ筆採つて贊して曰はく「馬といふも妨げなし」由利滴水直に亦「馬鹿いふな」と書し、松山舜應傍らより出て、「そんなことは塞翁

の馬だ」と續いて橋本峨山「竹篦があるぞ」中原東嶽「うまい〳〵」河合清丸「叱々」鈴木無隱「阿房の戯れ」堀龍屋「何とてもいへ」と書し了つて、呵々大笑其の日の法會は只此丈にて了れりと。

熱殺寒殺

心眼未だ明めざるの僧あり、洞山大師に見えて、問答す。曰く、

僧寒暑到來如何が廻避せん。

洞山何ぞ無寒暑の所に向つて去らざる。

僧如何なるが是れ無寒暑の所。

洞山寒の時は汝を寒殺し、熱の時は汝を熱殺す。

一休高野山に失敗す

長泉房中義は、高野山の英僧なり。一日路傍において、旅僧の大般若の上に腰打ちかくるを見て、詰つて曰はく、子の腰をかくるは、大般若にあらずや、何ぞ不敬なること此の如きと、旅僧冷笑して曰はく、吾も大船若の一部なり、大般若の上に大般若を重ぬる、何の咎かあらんと。中義忽ち旅僧の膝頭に腰を据ゆ。旅僧叫んで曰はく、痛しと。中義笑ふて曰はく、大般若の上に又大般若を置く、何の咎かあらんと。旅僧は即一休なりしなり。

一休又弘法大師の入定せる窟前に至り、歌ふて曰はく、

弘法は虚空の宅に入りもせで
心狭くも空に入るかな。

窟中忽ち聲あり。曰はく、

入りぬれば虚空も定もなきものを
心狭くも空と見るかな。

謙信と宗謙和尚

上杉輝虎は不識庵と號す。其の達磨不識の公案に參して省悟したるを以てなり。天資英邁、能く兵を用ふ。永祿年中京に上り將軍義輝に謁し、管領職を賜はる。當時暇ある毎に、輒ち諸山の禪將を請じ、必要を問ふ。聞へらく、頗る得る所ありと、自負の念勃々たり。越後林泉寺の益翁宗謙禪師が機鋒峻嶮當るべからざるを聞き、乃ち訪ぬて山に入り、自ら之を迎へんとす。師乃ち輝虎を顧みて達磨不識の公案を擧し、曰はく、不識の意如何と。輝虎茫然として答ふる能はず。師曰はく、太守常に快辯喋々す。而も這裡に至つて口を開く能はさるは何ぞと。輝虎通身汗流れ、慚服して教を乞ふ。師曰はく、不識の意を知らんを要せば、須らく大死一番乾坤を坐斷して來れと。輝虎退いて工夫すること數月、計らずして大悟す。乃ち走

つて山に入れば、師喜び迎へて其の未だ一語を發せざるに、太守既に徹せりとて、之を可とす。禪虎たゝに於いて髮を削り、謙信と稱す。天正六年三月左右を顧みて曰はく、四十九年夢中醉。と書し了りて長逝す。一生榮耀一杯酒。

虎の問答

南泉和尚、初め歸宗、麻谷の二師と行脚せし時路に一頭の虎の横はるに逢ふ。三人漸く其傍らを過ぎ、行くこと少許にして、南泉歸宗に問ふ「先きに虎を見たり。箇の何にか似たる」宗曰はく「箇の猫兒に似たり」と。宗又麻谷に問ふ。麻谷曰はく「箇の狗子に似たり」宗又南泉に問ふ。南泉曰はく「我見る二箇の大蟲に似たり」と。

念佛の批評

歸り、念佛を以て名高き、一遍上人、初め某禪師に謁して所見を述べて曰はく、

唱ふれば佛も我もなかりけり
南無阿彌陀佛の聲ばかりして。

と、禪師曰はく、未だし。上人復呈して曰はく、世をすてゝ身はなきものと思へども雪のふる日は寒くこそあれ。禪師此に至りて曰はく、良しと。

進めば叱し進まざれば叱す

南禪師、積翠に住する時、一僧に向つて曰はく、百千の三昧無量の妙門今一句となして汝に說與せん。却て信するや否や。僧曰はく、何ぞ信せざらん。師乃ち其の左を指し這邊に進み來れと。僧將に往かんとすれば、師叱して曰はく、徒らに聲を追ひ色に奪はる、何れの日か了期あらん、出て去れと。僧あり、之を聽いて趨り入り侍立す。師復左を指して曰はく、這邊に進み來れと。僧敢て進まず。師喝して曰はく、汝我に侍して我が言を聽かず出て去れと。

丙丁童子來つて火を求む

法眼禪師の會下に則監院と云ふ者あり。自ら大事を了畢せりと言ふ。法眼從容問ふて曰はく、汝何れの邊よりか、箇の入處を得たると。監院答へて曰はく、我れ嘗て某智識に問ふ、如何なるか是れ學人の佛。某答へて曰はく、丙丁童子來つて火を求む、と。我嘗下に了得す。法眼曰はく、汝此の答處を如何にか會すか。監院曰はく、丙丁は火なり。火來つて火を求む是れ即ち、自己を以て自己を求むるの云ふの意なりと。法眼忽ち叱して曰はく、汝此くの如く會せば如何ぞ大事を了畢せりと云ふべけんと。監院悉く示を乞ふ。法眼曰はく、請ふ試に問へ。監院又問ふ如何なるか是れ學人の佛。法眼乃ち聲を勵まして、丙丁童子來つて火を求む、と。監院豁然として言下に大悟す。

笛一吹

覺阿は、元と比叡の僧なり。別傳の法を聞いて宋に入り、佛海禪師に參して其證を受く。復歸朝して、四方に敎化す。高倉天皇、其の高德を聞き、宮中に召して、心要を尋ねたまふ。阿、一言の敎法に及ぶなくして、只一條の笛

を取り出して吹くのみ。君臣皆其意を解するなし。阿遂に飄然として出て去り、一小菴を結んで出でず。

大將軍を恐れず

大將軍曹翰南を討つて、途次九江を過ぎ、圓通寺に入る。寺衆驚愕皆狼狽して逃れ去る。綠德禪師、獨り端坐して動かず。將士入り來るも敢て起たず。翰怒て曰はく「長老人を殺すに眼を眨せざる底の將軍あるを聞かずや」と。師答へて曰はく「汝死を怖れさる和尙あるを聞かざるかと」。翰乃ち之を拜し、問ふて曰はく「衆何が故に逃げ去る。師曰はく「皷を擊たば自ら皈り來らん」と。翰乃ち一將をして皷をうたしむ。而して衆皈り來ら翰復問ふ「何が故にかへらざる」師曰はく「汝害心あるが故にかへらざるのみ」翰乃ち自ら起つて皷を擊つ。衆漸く集る。翰大に師を敬し、再拜して

勝を決するの法を問ふ。師曰はく「知らず」と。

「この一喝重さ幾何

東坡、佛印禪師に參じて頗る造詣する所あり。玉泉の承皓禪師が機鋒當るべからざるを聞きて、之を抑制せんと欲し、微服して其門を訪ふ。師乃ち、東坡に見えて其姓を問ふ。坡曰はく「姓は秤、即ち天下の老和尙を秤る底の秤なり」と。師直に喝して曰はく「此の一喝重さ幾何」と。坡憮然として應ふること能はず。

維摩默然

維摩は、又維摩詰とも云ふ。釋迦在世の時の居士にして、佛門に居士なるものあるは、之を始とす。曾て里耶離に於て、病に臥せし時、釋迦三十二

人の弟子を遣はして其病を問はしむ。維摩、其の弟子の至る毎に、輒ち問を設けて、入不二の法門（眞理の實躰）と云ふことを說かしむ。弟子等各々腦漿を絞り、所見を呈すと雖とも、盡く維摩のために勘破せられて敗闕し去る。釋迦竟に智慧第一の稱ある文珠菩薩を遣る。維摩復前きの問を擧げて文珠に示す。文珠答へて曰はく「一切の法に於て無言無說、無示無識、諸の問答を離るゝ、之を入不二の法門となす」と。是れ文珠が劈腹無心以て臆對せし所。說き得て餘蘊なきが如し。此に於て、文珠更に維摩に反問して曰はく「我既に說き了れり。居士乞ふ更に言へ、如何が是れ入不二の法門」と。維摩此の問に向て敢て唇頭を動かさず。唯々默然として之に對するのみ。

格機格外

物外と近藤勇

偏後尾の道の濟法寺に、物外和尙なる者あり。非凡の膂力を有し、寺の大黑柱を動かし、大釣鐘を外すなど、常人の及ぶ所にあらず。殊に拳を固めて樫の板などに押せば、拳々皆凹みを生ずること壬の如し。故に拳骨和尙と云ふ。曹洞派の僧にして、宗門錬膽の業を修めたるのみならず、兵法に詳しく、大坪流の馬術、實藏院流の槍術など、盡く其妙に達せざるなし。維新の際、京都に來り南禪寺の塔頭に寓す。一日出でゝ市中を悠遊し、會々とある邸宅の內にて竹刀の音囂しく、聲盛なるを聽き、元より好める道とて、窃かに窓に靠りながら內の樣を伺ひ居たるが、折惡しく二

三の若武者に見付られ、其無禮をとつて邸内に引き入れられ、汝僧侶の風裝をなせ共、思ふに武術の鍛錬あらん。此處は新選組の屯所なり。一太刀立ち合はずんば、其罪を赦さずと。物外頗る零落銷沈したる狀して、我は頃日遠き田舍より出京したる破れ坊主なり。斯る劍場において貴殿らと立ち合はんと思ひも寄らず。何卒御免ありたしと懇願すれば、壯士ら益々面白き事に思ひ存分に嬲り果れんと竹刀を差し向け迫るに、竟に止むを得ず、腰なる如意を取り出して立ち向ふに電光石火暫く中に數十人疊み着けける。此の時迄、遙の上段に坐して、瞬きもせず眺め居たる武士、飛び降りて、貴僧の手錬、中々若年等の及ぶ所にあらず、我は新選組の隊長、近藤勇なり。イザ、御合手致さんと柄太き槍を取り出したるに、物外只管謝り入り、音に聞く先生は武道の神なり。如何ぞ貧僧の手向ふ事の叶ふべきと、種々に詫び

たれど容赦せざるに、止むを得ず。さらば迚、再び彼の如意を持て立ち起がるに、勇聽かずして曰はく、武を鬪はすに其器あり。宜しく竹刀を探るべしと。物外曰はく、我は僧侶なれば、武器を探るべからず、只是にて可なりと。勇容易に許さず。乃ち頭佗袋の中を探つて、木椀二箇を取り出し、兩手に其の糸尻を握り、身構へしてば、何れよりなとも突けと言ひ放ちければ、勇大に怒り、憎き坊主の擧動かな。只一突きと、槍取り伸べたれど寸毫の間隙もなきに、兩々相睨み居たるが、如何なる隙や見出しけん、エイと突き出す槍先に、あはや、物外の胸板微塵と思ふ間もなく、ヒラリと身を翻はし、兩の木椀もて、槍の千段巻をしかと挾みたり。勇金剛力を出して槍を引かんとすれ共、さながら盤石に押へられたる如く、如何共する能はず。良々ありて、物外「カッ」と一喝しければ、勇覺えず後邊に尻つき槍は椀を離れて、兩三間を飛んでけり。此に於て勇驚愕起き來つて再拜し、其

の姓名を問へば、我は備後尾の道の物外なりと答ふ。勇も豫て其の名を聞き居る事とて、扨ては、貴僧は物外和尚なるかと、手厚く懇應なし、尊敬して止まざりき。

南洲と刺客

西郷隆盛京都にありし時、夜更けて他はり歸り來らんとするに怪しき武夫一人、其の後を着け來る。狀容易ならず。隆盛早くも其と察しけれど、態と徐々緩歩、雲耶山耶呉耶越と高聲放吟し、漸く己が寓所の門前に來るや否、忽然後を振り向きて「サア御斬んなさいよ」と呼びけるに、氣合を拔かれし武夫、憮然として如何ともする能はず。終にこそ〳〵と逃げ去りたり。

鐵牛の熱棒

鐵牛和尚は石見の人なり。名は道機、普應禪師はその諡號なり。手段の惡辣を以て聞ゆ。元祿十一年、仙臺の大念寺に請せらる。時に年七十。其の上堂の時、一僧問を放つて曰はく「蚊子鐵牛を咬む時如何」鐵牛直に藏身の狀をなす。僧曰はく「呑却し了れり」と。言未だ終らざるに、鐵牛大棒を揮つて「何ぞ這箇の一棒を餘し得たる」と一打すれば、其僧忽然棒下に倒れて絕命す。鐵牛徐ろに引導して曰はく、

提起向上耶一刀。虛空碎作七八斤。

釋元亨

其初め遠州引佐郡奥山の方廣寺より出てたる一雛僧の身を以て禪杖

一枝、足は滿清四百餘州を踏破したる上、印度、瓜哇、歐洲より亞米利加に渡り、其本務たる佛敎は云ふに及ばず、耶蘇敎、喇嘛敎、婆羅門敎の三宗敎迄も究め、農藝及醫學(瓜哇にありて闌人より學びたり)法律(米國イリノイス州の法科大學を卒業すの科學に通じ文學としては諸子百家を獵渉し、殊に武術に至りては、明治廿七八年戰役の際、清國にありて、水滸傳的の活劇を演じたる程の、修養ある釋元亨が壯快なる生は人の噴々する所なり。今更に改めて、其の戰役中最も快絶快絶なる彼が奇劇の一片を掲げん。

彼が湖南において元亨の首を獻ずるものには千兩の賞金を與へんとの高札を見て怫然として怒り、嘗て、イリノイス大學において、共に法律を修めたる青木喬と、警察署を脅かし、雲の如く飛んで廣西省に入るや。貴陽縣の武西に匿れ暫く大覺寺に足を駐め居たりしが、會々元亨の面

を識る清人三人ありて、窃かに之を貴陽縣署に訴ふ。縣知事李因覲直に命を警察署に下して、之を逮捕せしむ。時は恰も光緒二十年八月廿七日即ち我が明治廿七年九月廿五日、元亨は大覺寺の講堂において、數百の雲衲を集め、廣長舌を揮ふて、須彌典の講義を始め居たりしが、警官五人、突如として入り來り、官命を傳へて元亨徐ろに講を止めて曰はく「我元より一點の罪なし、此の場を逃れんは甚だ難からずと雖も若然がせんには、支那官吏の橫暴なる、必ず累を當寺に及ぼすべし。我當山の住職嶌山禪師に災をかくるに忍びずとて、從容として、靑木喬と共に縛に就く。斯くて縣署に至れば、忽ち鐵鎖首枷一夜を獄に投ぜらる。翌廿六日形の如く曳き出されて法庭に至れば知事李因覲、裁判長たり、警部、巡査、庭丁數知れず前後左右を取り圍みて毫末の油斷なし。李裁判長、先づ元亨が經歷より審問を起して、詰

つて曰はく、汝僧の服裝をなすと雖も、其實必ず日本の軍事探偵ならんと。元亨初めは溫然處女の如く、物和らかなりしが、軈て滔々無碍の辯をふるひ、辯疏說明、時々又、痛快なる舌鋒を以て支那の弊政を論じ、恰も寸鐵彼等が胸を刺すの慨あるに至る。判長等大に怒り、元亨を鞭たしむると再三、元亨胸に殺活の略を秘め、先づ彼等を怒らしめて、常識を失はしめんと欲し、或は怒らし、或は宥め、揶揄、翻弄、滿堂の精神をして醇酒に醉はしむる如くならしめしが、竟に大喝一番「エヽぐど〳〵し、我は元より兵事を知らず、只知るものは、貴國兵十人我が兵一人に叶はざるのみ」判官復、赫然として鞭たしむると急なり。時に元亨、靜かに陳べて曰はく「聊か證據あり。依て之を示さん、されど、此の儘にては身動きならず」と。判官等、直に警官に命じ其の手錠首枷を外づさしむ。元亨、乃ち屹然として法庭の中央に突つ立ち「證據は元亨が双腕にあり。イザ、一元亨を以て十の

清兵に當らんと、勵聲獅子の吼ゆるが如し、滿堂慴然として慄ふ。李判官狼狽急に命じて元亨を捕縛せしむ。警官元亨に迫らんとするや、元亨乃ち武伎の精妙を顯はして、其首を捕つて毅判事に打ち付け飛鳥の如く飛び來つて、一警部の佩刀を奪ひ、此より縱橫奮鬪、電光の閃く如く、薙き立てければ、須臾にして、堂上、堂下、鮮血淋漓として腥し。判官等生色なく、先を爭ふて逃げ去る。元亨叱咤後を追ふて、李裁判長を人礫に倒し毅判事を講渠に蹴落すなどさながら猛虎の群羊を驅る如し。署內の衆變を聽きて馳せ集り、盡く元亨に向ふと雖も、元亨、英氣益々加はり、竟に署內を蹂躙して再び法庭に立ち皈り、青木喬の縛を解き、相携へて大覺寺を過ぎ、終に桂平縣に向つて去る。

滴水と得菴

鳥尾得庵、一日滴水禪師と相對座して語る。時に禪師手拭を膝に措くを見て、得庵起つて手拭を採り師の頭に冠らしめて坐に復ず。師、從容として頓着せず。徐ろに手拭を採り拂つて、復膝に措く。得庵俄に大喝一聲師を突き飛ばしけれぱ、七十有餘の老僧將に微塵となるかと思ふ間もなく、機一髪、禪師得庵を突き返べして悟も狗の兒を投げ出すが如く坐上に顚倒せしめけり。得庵、後人に語つて曰はく、我彼の時投げられながら、一喝を吐きたれども、人に云ふべき限りにあらずと。

雲井龍雄と鐵舟

多感多涙、其の志ざす所水火も避けざる、東北の奇男子雲井龍雄が、佐幕回天の事業一敗地に塗れ、世は明治の御代となりても上下太平を謳歌するを見ては、胸中磊塊の不平遣る能はず、白眼以て薩長の政府を睨み、幽

四方の不平黨を集め、一擧天下を擾亂せんとす。而して未だ輿望器局の領袖たるべき人を得ざるに苦み居りしが、會々山岡鐵舟が幕府の遺臣にして、器中磊魁の偉丈夫なるを想起し、彼を說いて以て、吾が領袖たらしめんと欲し、直に其の宅を叩き、痛辯激語、娓々數万言を費して其心を傾けしめんとす。然るに、鐵舟黙然として聽き流すのみ、一言の可否を言はず。龍雄いらだちて、且つ問ひ、且つ迫る。鐵舟復た一言の答をなさず。是に於て、龍雄大に怒り、罵つて曰はく、貴公は其れ木石かと。眼血を吐き、殺氣紛々たり。鐵舟無言片手を伸ばして雲井が襟頸を掴むや否動とばかりに坐上に投げ出し、此の馬鹿野郎、天下漸く治まり、今や太平の緒に就かんとするに何を苦んで騒亂を好むかと、龍雄敵する能はず、終に這々の體にて逃げ去り、後人に語つて曰はく、彼の山岡鐵太郎ばかりは どうも恐しい。

虎林强盜を挫く

肥前性空寺の吉井虎林は黄檗派の老古錐なり。嘗て、劍を學び、又柔術の奥義にも達す。管長職に擧げられしも辭して歸國し、清貧自から樂む。一夜、强盜數人虎林の室に闖入し、各々白刃を閃かして金を强請す。虎林乃ち數金を出して之を與ふ。盜ら敢て聽かず。尚脅迫して止まず。虎林叱して曰はく、奴輩我は汝等の究して此に至れるを憐み、囊底を揮て之を與ふ。而も强迫此の如し。欲せずんは直に去れと。盜等大に怒り、白刃を揮つて迫る。虎林忽ち大喝一聲一人を蹴倒し、他兩三名を投げ付けしかば、各々周章狼狽して去る。

大獅子吼

大元と備前侯

大元和尚、曾て備前侯の菩提所なる曹源寺に住す。侯は英明の主にして、和尚が豪邁なるを愛し、禮遇甚だ厚し。一日、侯短銃を懷にし、急に和尚を召す。和尚至るや、不意に其の耳邊に就いて銃を發つされど、和尚は只微笑するのみにして、神色少しも動かず。已にして、和尚侯の耳邊に就いて大喝一聲す。侯喫驚一番頗る容色を亂せしといふ。

峨山の大喝男爵の喫驚

前の宮内次官男爵川口武定が、嘗て主計總監の休職中、泉州堺の南宗寺

に往來して、峨山和尚に參禪せしことあり。峨山は後天龍寺に住して、大に法幢を振ひ、威名一世を風靡せし雄物なれば、高位貴顯と雖も、法の上に於ては少しも人情を借さゝるを常とし、川口男が入室の度毎に、種々の理窟悟をふり廻はすを手にあまし、一日男が三拜して將に入室せんとする時「ヱヽ、復何時もの粕理窟か」と、大喝一聲、霹雷の一時に落ちかゝる如く怒鳴りければ、流石の男爵も如何ともする能はず。後人に語りて言へる樣、予は海軍で大砲の音などは耳に慣れ、隨分鍊えた所もあると思ふて居たが、アノ時の一喝には、膽が破裂したかと思ふたと云はれしとぞ。

天叡債主の膽をつぶす

加州金澤、淨住寺の住職長谷川天叡は、磊落不羈の偉丈夫にして金錢の

有無に關せず、飲み且つ食ひ、少しも經濟に頓着せざりければ、負債山の如く、債主來つて督促すると接踵矢の如し。サレド、天叡は其度毎に、雲水をして主人不在なりとの一言を以て、門前拂ひなしけれども、終には債主も其の手に乘らず、單刀直入、方丈室に闖入して嚴談に及はんとするや。天叡、兩眼クワツト睨み付け、主人自ら不在と云ふに、何の僞りのあるものかと、債主膽をつぶして逃げ去る。

唯儼の大笑

唯儼禪師は、唐の絳縣の人なり。幼にして思へらく、大丈夫當に一世に超脫なるべし。徒に俗塵に出沒して、何をかなさんと。竟に石頭に見えて心印を受く。一夜藥山に登て經行す。忽ち雲開いて月の出つるを見て、呵々大笑す。其聲、澧陽の東九十里に聞ゆ。翌朝澧陽の人相怪んで山に登る。徒

衆告げて曰はく、昨夜師山頭にあつて大笑す、是ならんと。朗州の刺史、李翺屢々來つて師に參して契悟す。頌を送つて曰はく、

選得幽居愜長情。終年無送亦無迎。有時直上孤峰頂。月下披雲笑一聲。

井伊侯茶碗を落す

江州彦根の清涼寺は、井伊侯の香花院たり。寒山和尚の初めて住職となるや、侯、寒山の惡辣手段を有し、絶世の器量あるを聞き其を試さんとて、一日和尚を請じ、讀經せしめたる後、餐應の膳部を出し、妙齡の美人に給仕をなさしめ、五合入り餘りの大盃を與へ、酒なみ〳〵とつがせ、和尚が今や將に飲まんとする一刹那、豫てしめし合したる侯の一咳に庭前の大砲一發ヅドンと切つて放したれども、不敵の寒山素知らぬ顔にて酒飲み干し、大盃を下において、扨「今の音は何でありますか」と問ひければ、

侯も底氣味惡く、曖昧なる返答をなしたりける。和尚這は畢竟己を試驗したるものならん、いま〳〵しきことゝ思ひ、機もあらば其の返報せんと、待ちかまへたる折柄、一日、井伊侯墓參の爲清涼寺に參詣ありければ、和尚自ら出て迎へ、恭々敷坐に請して、侍僧をして茶を進めしめ、侯の今や口にせんとする一刹那に「カッ」と大喝一聲、侯の心肝を破りしかば、侯、思はず茶碗をとり落し、茫然自失、漸く正氣を取り直し「今のは何である」と不承げに問はれければ、和尚すかさず「今のは大喝であります」と、答へて平然たり。

間部下總守の戰慄

幕末の頃、老中の職にありし間部下總守は、博學多識の譽ある人なりしが、或時其の菩提所なる、越前鯖江の万慶寺住職に案内させて、曹洞宗本

山永平寺に登り、時の貫主臥雲禪師に面會し、四方山の話の末、何處にても宜しけれど、吾が手蹟を額になしくれよと頼みたりき、永平寺は元より勅額の古刹にて俗人などの額をかくべき處にあらざれば、禪師も躰よく斷りたれど下總守いつかな聽かず、再三再四迫りて止まず、禪師乃ちむつくと居直り、勵聲一番、「永平寺は勅額の道場にて、汝が如きヘボ儒者の額など掛くる處に非ず」と叱咤したるに、下總守膽を冷し、挨拶もそこ〳〵に逃げ下りしとぞ。

義堂と西鄕隆盛

長藩、天龍寺と緣因あり。蛉下立賣の變あるや、長軍又天龍寺に宿りしの故を以て、會津、薩摩の藩士の如き、頗る鹿王院義堂を惡み、殊に西鄕隆盛の如きも、大に之を疑ひ、一夜、其の歸路を要し、壯士十餘人を率ゐ、各々長

槍を採つて之を圍み、將に一と突に刺さんとしけるに、義堂少しも騷がす。一睨喝して曰はく「コノ痩坊主一人を殺すに、五人十人かゝらねばやれぬか、其んなざまで人が殺されるものか、馬鹿め控へ居れ」と、壯士等體すくみて如何ともする能はず。義堂悠々と歸り去る。隆盛いたく其の膽に服し、節を屈して入室參禪を請へり。

鄧州の號令

中原鄧州は、妙心寺派の老古錐なり。山岡鐵舟嘗て之に南天の棒を贈る。故に又南天棒と號す。手段惡辣學者風を望んで恐れ走る。一武官あり、來つて心要を問ふ。鄧州曰はく「子能く幾何の兵を指揮し得るか」と、武官曰はく「現に一大隊の長たり」と。邨州復曰はく「即今我が面前において之を指揮し看よ。吾子に禪要を語らん」と。武官疑義す。鄧州乃ち厥起して武官

の背に跨り厲聲疾呼「大隊進め」と、さながら百雷の落つるが如し。武官喫驚驚汗流れて言ふ所を知らず。

生死脫却

電光影裏に春風を斬る

鎌倉圓覺寺の開祖、佛光國師名は祖元別に無學と號す。宋の明州慶元府の人なり。初め徑山に到つて無準和尚に見ゆるや、無準授くるに趙州無字の公案を以てす。師、朝參暮參孜々として體究すと雖も、省發なし、終に五年を過ぐ。一日憤然として無字を提撕し、烈しく進んで息まず。竟に無字三昧の界に入つて、大死一番動かさるると木佛の如し。衆其の死せるにあらずやを疑ひ、手を以て鼻頭に觸るゝに、尙微息あり。乃ち夜に入れば、布を以て其の頭に覆ふのみ。此の如きもの三日三夜なり。一夜寺僧木版を打つと一下。其聲耳に徹して忽然省發す。有名なる一槌擊碎の偈は、此

の時口を衝いて出でし句なり。後師は台州の眞如寺に住す。會々元兵南下して宋を蹂躙す。師亂を避けて溫州の能仁寺に移る。元兵復來つて、溫州に亂入したるを以て、寺衆皆先を爭ふて奔竄するや、師獨り泰然として堂裡に坐ず。元兵群がり來り、一將刀を揮ふて師の頸に當つ。時に師神色少しも變せず、從容偈を說いて曰はく、

乾坤無地卓孤筇。喜得人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風。

元兵其の學動に驚き、大に敬畏の念を抱き、懺謝して去る。

快川火焰裡の一句

甲州慧林寺の快川紹喜禪師は、武田信玄の師にして道譽一世に振ふ。正親町天皇敕して、大通智勝國師の號を賜ふ。織田信長、嘗て其英名を慕ひ、

其武田氏を滅すや、使を遣はして師を招かしむ。師固く辭して行かず。信長こゝに於て大に怒り、兵士數百人をして慧林寺を圍み寺衆百餘人を山門の上に追ひ上らせ、其の下に薪を積んで之を焚かしむ。時正に天正十年四月四日、師黑烟團々たる中にあつて、徐ろに衆を顧みて曰はく、汝諸弟末後の句を吐けと。衆僧各々發語す。而して、猛火將に師の法衣に及はんとするに臨み、師從容として末後の句をなして曰ふ、安禪は必しも山水を用ゐず。若し其れ心頭を滅却すれば、火も亦涼しと。既にして火袈裟に及ぶ。師恬然として衆と共に坐化す。信長の兵之を見て、皆舌を卷き、一僧をして、師の法脈及び系譜等を抱き去るを許したりと云ふ。

雲峰白刃の下に頸を延す

杭州徑山の雲峰和尙、德望甚た高し。雲川の何山に住するに及んで、雲衲

四集、殆んど五百に超ゆ。南宋の末年、天下大に亂れ到る處兵亂を免れず。寺亦、其の厄に遭ひ、將士來つて和尚に迫り、金を求む。和尚自若として曰ふ、寺あり、僧あるのみ。豈汝に與ふるの金あらんやと。將士、怒つて白刃を閃めかし、和尚の頸に擬す。和尚首を延へて曰はく、殺さんと欲せは即ち殺せ。吾が頭は汝が刀を礪く石にあらずと。泰然動かざること山の如し。將士、感嘆刀を拋つて去る。

雪村佛光の偈を誦ず

雪村梅友禪師、年十八にして海に航して元に入る。初め元主、兵を日本に加へて大敗し、二世仁宗位に即くに及んで、尚初志を償はんとす。師の日本人なるの故を以て頗る之を疑ひ、乃ち捕へて獄に投じ、鞭笞拷掠を極むと雖も、師、敢て介意せざるものゝ如し。終に死刑に處せらる。其の殺さ

れんとするの日、師は斷頭場に立つて、徐ろに佛光國師の偈を誦して曰ふ、

乾坤無地卓孤筇。喜得人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風。

司獄驚いて之を上奏し、爲めに死を免かる。而して、尚、獄にあり。佛光國師の偈の韻を次て曰はく、

百城烟水一枝筇。觸目無非是幻空。童子曾參無厭足。鑊湯爐炭起清風。

と。西蜀に竄せらるゝこと十年、名聲漸く天下に高し。赦されて長安に歸り、居ること三年、文宗位に即くに及んで、勅して翠微寺に登し、寶覺眞空禪師の號を賜ふ。後竟に四十歲にして歸朝す。

獨園は我なり

明治の初年、排佛の論天下を風靡し、到る處、堂塔を毀ち寺祿を沒し爲め

に輕薄の僧侶ら、往々〳〵髮を蓄へて還俗するものあり。此の際、毅然として輿論に抗し、佛敎の將に滅されんとするを、救護せるのみならず、活殺の手段を用ゐて、大に其の光輝を發したる者は、京都相國寺の獨園禪師なり。

五年、朝廷敎部省を置き、神佛を合併して大敎院を建つるに及び、師を召す。時に排佛の論ます〳〵熾に、往々、白刃を以て僧侶に迫るものあり。故に衆皆其束上を危み之を諫止す。師曰はく、法の爲めに死する何の苦しむ所あらんと。雲衲三十餘人を率ゐて上京し、麻布天性寺に入る。初め權少敎正に補せられ、次て大敎正に進み、更に大敎院長となり、後又曹洞黃檗臨濟三派の管長に任せらるゝ。一日師外出せんとして、將に門を出んとする折しも五六名の壯士眼を瞋らして來り、殺氣紛々、師に問ふて曰はく「獨園は何處に居るぞ」と。師靜かに立停り「獨園は我なり、何の用かある」

壯士等、怫として躊躇せしが漸く意を決し「吾等は外敎徒なり。只貴僧あるが爲に願望を貫く克はず。故に乞はんとする所あるなり」と。師曰はく「我一人あるがため、公等の意を達する能はざるとは、幷も如何の大事ぞ」壯士曰はく「要は唯佛敎の撲滅を企圖するのみ、然も貴僧あるがために能はず。依て貴僧の首を受けたし」と。師曰はく「幷は至て容易き事なり。何ぞ直に殺さゞる」と。恬淡生死を拋つて答ふ。壯士ら互に相顧みて動く能はず。竟に低頭其罪を謝し、復害を加へざるを誓つて去る。

火定

惠春尼は、容色衆に優れて美なれども、脫塵の志ありて、其の實兄なる、相州最乘寺了菴禪師に至り度を乞ふ。師曰はく「我が門の箇事は凌霜の志氣ある大丈夫にあらずんば能はず。濫りに婦女子の法門を汚すを許さ

ずと。尼乃ち退いて、焼け火箸を以て縦横に己が顔を烙き、以て決意を示す。師止むを得ずして剃度す。是より勇猛精進、参究し了れり。機鋒精鋭にして、往々四方の老衲を避易せしむ。晩年に至り、最乗寺の門前なる石上に、薪を積み、自ら其の上に趺坐し、火を放つて火定に入る。見る者寒毛卓立す。火熾なるに及び師來つて曰はく「尼熱きか、尼熱きか」と。尼黒煙烈火の裡に聲を勵まして曰はく「冷熱は生道人の敢て知る所に非ず」と。神色自若として寂示す。

戰陣

楠正成

建武三年五月、楠正成、綸命を奉じて播州湊川に出陣し、廣嚴寺の山下に營を聲る。二十四日、正成突然廣嚴寺に入り、明極楚俊禪師に見えて問ふていはく、生死交謝の時如何。禪師いはく、兩頭ともに截斷して、一劍天に倚りて寒し。正成いはく、落處什麼生。禪師威を振つて喝一喝す。正成通身に汗流れ起ちて三拜す。禪師いはく、公既に徹底せり。正成いはく、若し來りて和尚に見をずんば、安くんぞ向上の關涙を超出することを得ん。今より世々針芥を失はざらんと。禪師いはく、公の問對甚だ奮拳の者に似たり。曾て他の宗匠にまみえざれることありや。否や。正成いはく、む

かし、南都に赴く途中に於て、一僧に逢ひ、ゆく〳〵問答し、以て疑義を質せり。僧いはく、丞の名は如何ぞ、いはく、正成。時に僧、正成と呼ぶ。予應諾す。僧いはく、是れ何ぞ。予ここに於て心中豁然これより後ち屢々その僧に就いて、垂示を受くる事八ケ月、以來、兵を用うることと無礙自在なることを得たりと。禪師いはく、善哉多年作家の爐鞴に入り來らずんば、爭でか今日あることを得ん。正成拜謝して佛殿に入り佛を禮して去る。明日、敵兵、海陸競ひ進む。激戰數十回、正成遂に廣嚴寺の無爲庵に入りて兄弟一族列座して將に自盡せんとす。正成其弟正季をかへりみていはく、死して何をか爲さんとする。正季いはく。願はくは、七たび人間に生れて國賊を滅ぼさん。正成いはく、是れ實に我が心を得たり、復た疑着する所なしと、乃ち互に相刺して自盡す。實に建武三年五月二十五日なり。禪師、庵中に入り、遺骸を收めて庵側に葬りたりと云ふ。

謙信の三昧

謙信が兵を用ゆるや、發風閃電頗る禪機に冥合するものあり。永祿四年、忍城を攻むるや、唯僅かに數騎を率ゐて彈丸雨注の中をゆく。宇佐美良勝、源九郎義經が弓を拾ひし例を引いて、いたく其輕擧を諫む。謙信笑ふて曰く、人の生を必するものは死し、死を必するものの反つて生く、生死は天にあり。只之を恐るゝと否とは其の用意如何に存在すと。聞く、彼が攻城野戰の際、青竹を揮つて敵味方の間を橫行すれば、兩陣分れて一條の道を開くと。一氣に進んで退かざる境界、已に生死を脫却したるを想見すべし。

北條時宗の一躍

相模太郎臍斗の如しとの句を吟賞するものは、北條時宗が、絶代の天稟を有して天空海濶の上機なりしを想見すべけれど、其幼時に於ては、意志極めて薄弱なる優柔漢にして、事をなさんとするに方りその結果の必ず良好ならざるを信ずると雖も、猶自から奮つて之に當るを得ず。年壯なるに及びては、智は益々精、才は愈々巧なりと雖も意力依弱恰も處女の如くなりしかば、時宗深く之を歎じ遂に禪門に投じてその心臍を錬らんと欲し、當時有名なる彼の祖元禪師に師事し、問ふて曰く、人世の憂苦は怯弱を以て最もとなす。如何してか之を脱せん。禪師の曰く、之を脱すること甚だ易し。正に怯弱の來る所を閉つべしと。時宗曰く、怯弱何れよりか來る。禪師曰く、時宗より來ると。時宗反問して曰く、我怯弱を惡むこと甚し、曷ぞ時宗より來るを棄てゝ來れ、果して臍坤宇の如くならんと。時宗曰く、如何にして時宗

を棄て去らんか。禪師の曰く、一切の念慮を絶て。時宗曰く、その法如何。禪師曰く宜しく打坐して諸念を放捨し深く三昧に入るべし。時宗曰く俗家事務を免れず、光陰の迫しきを如何せん。禪師曰く、行住坐臥一切の事務之れ好箇の活道場なり。一氣に進んで退くなかれ。時宗曰く願くは禪師大慈を垂れて乳汁を與へられんことをと。禪師即ち、五ヶ條の要訣を示して曰く「外界の事物に此心を右左せらるゝが故に、此心此心なる能はざるなり。常に坦然として、外界の事物に心意を搖奪せらるゝこと勿れ(一)此心常に動いて、外界の事物に貪着すれば、必ずその他を忘却すべし。突然の怖風は、此間より生ず。一方に注意すること愈々深ければ、一方の油斷も亦愈々深きなり。つとめて平如として執縄貪着すること勿れ(二)才略智謀に恃む所あるべからず。恐懼の魔風は、才略智謀の設計を現出するの原動なり。その機に當り變に應じて此心を失はざれは必ず

靈妙なる當即の作畧皆計を生ずべし。宜しく、常の時と非常の時とその心を一にすべし。(三)勇猛の志氣は能く白刃をも踏むべし。柔懦の脆脉は窓隙の風を忍ぶ能はず。宜しく、常に勇猛の志氣を保持すべし。(四)見ると ころ狹少なるときは、その觀念狹少にして、膽量亦自から狹小なり。須らく常に注意して、その心思を擴大にすべし(五)」

以上の五事は、即ち怯懼の根原を截斷するの利刃なり。應に此の五事を以て行住坐臥すべしと、時宗拜謝して去る。爾來工夫百端すると雖も意の如くならず。却て安想前に倍して齷齪たり。時宗誓つて退轉せず。錬膽、年を積んで師の言に叶ひ生死一如の大安神を得るに至る。たゞ〳〵元寇の大事突起し來つて、以て人の心膽を攪破し去らんとせり。時宗坦然、祖元禪師に見えて曰く、大事到來せり。禪師の曰く、如何に向前せんとすや。時宗乃ち身を躍らして大喝一聲す。禪師曰く、眞の獅子兒なり。能く獅子吼せり。直ちに前進して回顧する勿れと。時宗拜謝して出で、遂に二十四方の外敵を、筑紫の海戰に鏖殺し、元をして復た我が邊境を窺はしめず。

松崎大尉

陸軍大尉、松崎直臣、東京にあるの日、原坦山を訪ふて禪要を問ふ。坦山曰く、汝未だ禪理を語るに足らず、速かに出て去れと。直臣曰はく、無常迅速、生死事大なり。然るに、未だ安神立命の道を知らず。老師願はくは、大慈悲を垂れ、我に敎示を賜へと。坦山曰はく、汝知らずや、非ず所詮非識所識。禪は決して耳の學にあらず。もし此の事を知らんとせば、退いて靜慮すべしと。直臣乃ち宅に歸り、靜坐工夫する日あり、一日坦山の室に入り所見を呈す。坦山叱して曰はく、門外の容禪、皮相の見禪何ぞ口舌にあらん

やと。直臣乃ち劍を抜き奮進して曰はく「正當恁麼の時如何」と坦山從容煙草を吹かしながら「烟管依舊吐瀧烟」と。直臣劍を納め再拜して曰はく、我今日此の事を了すと。將に出て去らんとす。坦山墓地に其胸を採つて曰はく「生哉全機現。死哉全機現。何論去來說生死」と。直臣應へて曰はく「日沒西山歸途遠。勿勞尊翁老疲身。」と。坦山笑ふて手を放つ。直臣此より獅子兒の名あり。明治廿七年日清兵を交ゆるに當り、二十一聯隊第一中隊長となりて渡韓し、安城渡において奮進し、遂に敵彈に中りて戰死す。山曰

川中島の陣

謙信は宗謙禪師に參じ、信玄は快川禪師を師とす。二將各々獨得の禪機あり。川中島の役、謙信常に信玄を所らざるを憾みとし、信玄亦謙信が迅速の矢資あるを老成の計なきを唱ふ。謙信兵を用ゆる事風の如く、信玄

軍に臨むで泰山の如し。

弘治三年八月謙信復川中島に出て河を渡り、水を背にして陣す。薪を積むこと山の如く頗る持久の狀あり。信玄其志必す死を決するを慮り、左右を顧みて曰はく「夜中北軍必ず火起らん、愼んで進擊する勿れ。もし命を犯さん者は極刑を加へん」と。暮に及んで候騎り報じて曰はく、北軍荷擔して將に去らんとすと。諸將爭ふて追擊せんことを請ふ。信玄固く許さず。夜半に至り、北軍果して火起り、煽煙大に張る。甲斐の軍動かず。聞として營中人無きに似たり。天明くる頃、謙信嚴として鶴翼の陣を張り、甲軍を待つもの如し。信玄乃ち伏を兩山の間に設け、馬數頭を敵陣に放ち、輕卒を出して之を追ふ。謙信亦動かず。信玄舌を卷き兵を收め、夜に乘じて上野原に入れば、謙信迅雷の如く追ひ來る。信玄乃ち返戰殺傷交々相當る。

臨終

苦惱なき時如何

甘露亞相曾て大燈國師に參じて深く造詣する所あり。會々病に臥して起たず。關山國師往て問ふて曰はく、公病篤しと。苦惱ありや、否や。公曰はく、我即今大光明藏三昧に入りて和尙と相見し了れり。更に什麼の苦惱かあらんと。師詰して曰はく、苦惱なき時如何。公喝一喝して逝く。

坦山の臨終通知

明治十五年の夏原坦山、四大調はず。自から其圓寂を知り、端書に書して知人に通知す。

拙者儀即刻臨終仕り候條此段御通知に及候也

七月二十七日午後三時三十分

と、書して、三十分を過ぎて逝く。時に壽七十四なりと云ふ。

清拙和尙

清拙禪師は、福州の人なり。嘉曆元年、海に航して博多に來る。北條高時迎へて建長寺に居らしむ。小笠原貞宗其所領なる信州伊賀良に開善寺を建て、師を迎へて開山第一世とす。曆應二年正月、師微恙あり、十七日、沐浴して淨衣を着け、侍者を顧みて曰はく、汝最後に於て我に侍ずと。還つて末後の句を會すや否やと。侍者潛然として應へず。師乃ち、呵々大笑して曰はく、今日は百丈祖の忌日なり。吾當に行脚すべしと。筆を採つて遺偈を書す。

昆嵐卷空海水立。　三十三天星斗濕。　地神怒把鐵牛鞭。
石火電光追不及。

と書し了つて化す。

大賢尼

尼大賢は、三十二歳にして初めて雲棲大師に參して、念佛の公案を受く。乃ち廬を別野に結び、數旬出でず。往々日を拜せて喰するあり。其兄弟皆顯貴なり、而も、尼、名聞を好まず。道念を失せんことを恐れ、兄母を避け、往來を絶し、僅に音信を通ずるのみ。常に施を好み、家内戸を排せず。盜の入るあるも携ふるものなし。尼自ら起つて瓶を傾けて粟をおくる。諸緣を放捨し、心志を灰にす。粟を飲み、氷を食ふ。三十年、猶一日の如し。一日坐右に書して曰はく、我九月十三日に去ると、拜せて之を他の同行者に告ぐ。期

に及びて、之を觀る者市の如し。午に及んで、果して跌坐合掌して逝く。鼻双玉をたれ、異香旬を經と、傳ふ。

法心死期を知る

法心禪師は、壯年にして出家す。始め、宋土に大宗匠のあるを聞いて、乃ち商船に塔して海を渡る。徑山に抵り、佛鑑和尚に見えて開示を乞ふ。而も、師は無學にして文字を知らず。鑑、圓相の中に一丁字を書して之を授く。師乃ち席下に止まつて、憤然として兀坐し、以て箇事を明めんとす。寒熱を怖れず、歳月を顧みず。臀肉腫れ爛るゝも總て顧みるに暇あらず。此の如くするもの九年、乃ち悟入することを得たり。歸朝の後、奥州松島に圓福寺を開いて禪客を引接せり。師は臨終の前、七日、其死期を知り、諸徒に謂つて曰はく、某日吾當に滅を取るべしと然も身に恙なし、諸徒頗る之を

信せず期に至つて常の如く齋し、罷で衣を披し椅に坐す。侍僧遷偈を乞ふ。師元より文字を知らず、乃ち偈を唱べて曰はく、

來時明々。去時明々。是個何物。

侍僧曰はく、猶末後の一句を缺くと。師、聲を震ふて一喝して便ち示寂す

臨終の離別會

上總國鹿野山の麓なる天南寺に一禪僧ありけるが、一日四隣の人に告げて曰はく、吾明日正午に死せん。依て留別の宴を開かんと。隣人皆奇異の思をなし、翌日集つて宴に列すれば、僧健全欣々として酒杯を飛ばす。既にして正午に至るも、談笑平日と異ならず。少しも死期のせまりし樣子見えざりければ、人皆以て誕謊となしけり。一人乃ち詰つて、其食言を責むれば、僧對へて、我の最も愛する弟子某と云ふものあり。將に來るべし、只其を俟つのみと。已にして、某到り席に就くや、僧眼を某に注ぎ、杯を與へんとして、右手を伸ばしたるまゝ俯して逝く。

普化禪師

臨濟宗護法の神として、威靈を百世に垂るゝものあり。即ち普化宗の開祖なり。彼が末後の一戲亦見るべきなり。普化一日市中に出て、人に就いて直綴を乞ふ。人皆之を與ふ。普化盡く要せず。臨濟和尙、乃ち院主をして棺桶一箇を造らしめ、普化の歸り來るを俟つて、之を與ふ。普化自ら擔ひ去つて市街に出て、繞つて曰はく、臨我が爲に直綴をつくり了れり。我東門に徃いて遷化し去らんと。市人競ひ集つて之を見る。普化曰く、我今日未た去るべからず。明日南門に於て遷化せんと。市人復た集り見る。如此もの三日、市民終に普化の言を信せざるに至る。第

四日に至り人の集り來らざるを伺つて、城外に出で自ら棺桶の中に入り、行人を要して之に釘せしむ。其事忽ち遠近に傳聞し、市人爭ひ來つて棺を開けば、隻影なく、只空中に、鈴の音隱々として去るを聞くのみと。

腮の長い長四郎

東海道、駿遠二州の間を出沒する賊に、長四郎と云ふものあり。一行脚をつけ覗いて、其の嚢を奪はんとし、宿れば與に宿り、憩へば與に憩ひ、鵜の目、鷹の目、つけ廻はると雖も、些の間隙なく、手の出し樣もなかりけるが、一夜旅宿にあつて、其の僧の眠れる頃を伺ひ、其の室に忍び入らんとすれば、何ぞ計らん、僧は去つて跡形なく、只、一樹の柏の高く聳ゆるのみなりければ、長四郎驚くこと一方ならず、窃に去つて考ふる樣、這は畢竟魔術を行ふて、我を驚かせしものならん。我もし、彼の魔術を學び得て、賊を

行はゞ、紀文が富も立どころに成し得べし、若かず、明日彼の僧に就いて、聞き糺さんものをと、翌日復た僧に尾して行く事數里、僧に隨ふて一茶店に入つて、憩ふ頃、長四郎、慇懃に叩頭して、實を告げ、願はくは魔術を行ふの法を聽かんと。僧曰く、汝が素行甚だ惡むべしと雖も、正直なる所、聊か愛すべし。汝もし、此の法を知らんと欲せば、此の話頭を看よ。昔僧あり、趙州に問ふ。如何なるか是佛祖西來の意。趙州曰はく、庭前の柏樹子。と、唯是の柏樹子を參究し來れ。吾は白隱と云ふものにして、將に江戸に至らんとするなり。汝が柏樹子を看破するを俟て、江戸に於て再會せんと。長四郎、宅に皈つて妻子を避け、風呂桶の中に入りて、吃然端坐、一心不亂となりて柏樹子の話に參じ意に計らず大悟徹底し、是より漸く、從前の非を改悛して、正業に從事し、剩さへ溫良恭謙克く鄕黨の無賴を敎化し、且つ公共の務に斡旋するに至りたれば、德望亦自ら遠近に傳ふるに至

れり。斯くて獰惡なる掏兒の隊長たりし彼は一鄕の重ずる所となり、安樂なる一生を送りたるが、其の臨終の數日前、親族故舊を集めて曰はく、我某日を以て世を去らん、願はくは幇助ありたしと。衆皆曰はく、生くるを助けんは敢て難きにあらさるべけれども、死せんを幇助するは甚だ易きにあらさるべしと。長四郎曰はく、否、敢て公等を煩はすに非す。只、我臨終に當つて、我が身邊を圍繞せよ。且つ我が「腮の長い長四郎」と、唱ふるを俟つて、公等亦「腮の長い長四郎」と、是に和すれば良きのみと（長四郎下腮非常に長し、故に未だ盜賊を働きし頃より、腮の長い長四郎との世評ありしなり）期日に至り、約の如く、長四郎齋戒沐浴して端坐すれば、親族故舊、皆之を圍繞す。長四郎先づ自ら唱へて「腮の長い長四郎」と發音すれば、衆皆之に倣ふて「腮の長い長四郎」と呼ぶ。此の如きもの數十回に及んで、長四郎の聲漸く細まり行き、竟に微かに消え去つて、

其まゝ逝去せりと云ふ。

大應國師一年前に死期を告ぐ

大應國師は、駿州安部郡の豪族藤氏の子なり。正元の頃、宋に入つて虛堂の愚和尙に參し、孜々として怠らず。咸淳三年の秋、辭して歸朝す。時に文永四年なり。德治丁未、旨を奉して關東に赴き、正觀寺に留る。相州の太守平崇演、師を請して建長寺に居らしむ。明年の春、太上皇手書を下して問法す。恩遇甚だ篤し。師、入寺の夕衆に告げて曰はく、「今年臘月二十九日來るに所來なく、明年臘月二十九日去るに所去なし」と。衆驚愕して其の意を知る能はず。翌年延慶戊申、臘月二十九日に至りて、忽ち微恙を示し、二鼓に至つて頌を書して曰はく、

阿風罵雨佛祖不知　一機警轉閃電猶遲

と、書し了つて、端坐して逝く。

臨終の旨訣

費彭器資尊宿に見ゆる毎に、乃ち問ふて曰はく、聞く達道の士は臨終に於て大自在ありと、旨訣ありや否や。尊宿往々旨訣ありと答ふるもの有り。器資輒ち物に嗤ふ。後年、晦堂老漢を拜して道を問ふに當り、二日從容として問ふて曰はく、「達道の人往々臨終に大自在あり。旨訣ありや否やと。晦堂應へて「旨訣あり」と云ふ。器資曰はく「得て聞くべきや」晦堂曰はく「汝が命終るを俟て乃ち說かん」と。器資乃ち起つて禮して曰はく「大和尚に見えて此の事を了ず」と。

叫聲數里に徹す

巖頭豁和尚は唐の大なる人の來つて、佛を問ひ法を問ふものあれば、輒ち嘘聲をなす。曾て衆に告げて曰はく、我逝かん時、大に吼ゆること一聲せんと。後、中原大に亂れ、盜賊横行し、衆皆避けて逃る。和尚獨り端坐して去らず。一日賊群り來つて寺に入り、財を求む。和尚怡然與ふべきなきを示して之を辭すれども、賊怒つて、遂に刃を揮ふて其の脇腹を刺す。和尚神色動ぜず、大に叫ぶこと一聲にして逝く。其聲數里に徹せりと云ふ。後年、白隱禪師解脫の道を求めて禪門に投ぜし時、巖頭和尚未後賊のために害せらるゝの傳を讀み、曰はく、禪門英豐の漢と雖も此の如し。佛法畢竟取るべきなしと、望を失ふ兩三歲なり。後、越の英岩僧舍にありて大悟するや大聲呼んで曰はく「巖頭和尚萬福現在々々」と。

不可思議力

普門の降魔

正應の頃、龜山上皇龍山の離宮に怪あり。毎夜、人なきに門戸自から開き、又自から閉づ。宮女屢々、其魔に遭ふて氣絶す。上皇甚た之を惡み、群臣を集めて議す。皆曰はく、此の地、從來妖怪を聞く久し。佛の威靈に依らすんば、如何せん。宜しく、高德の僧を迎へて之を鎭むへしと。乃ち、南都西大寺の睿尊に敕して、降魔の事を命す。尊、弟子二十人を率ゐて來り、晝夜、鐸を振り、咒を誦し、三閱月に垂んとして而して、怪故の如し。尊、屈して終に去る。上皇更に敕して、普門禪師を召し、訪ぬるに此の事を以てし、且つ曰はく、汝、果して能く居るか。門曰はく、書に云ふ、妖は德に勝たずと。儒すら尙

然り。況んや、佛法をや。佛之に居るに、何の妖か之れあらんと。上皇以て其言を壯なりとなし、復、之を命す。門、乃ち僧を率ゐて宮に入り、只、禪床に坐するのみにして他事なし。而して、爾來怪全く息む。上皇大に悅ひ、深く心を禪門に寄せ、弟子の禮を執つて坐禪を習ひ、竟に門に敕して、南禪寺の開山たらしむ。門の病に臥する、上皇親しく幸臨して慰問す。終りに臨んで、偈を書して曰はく。

來無所從。　去無方所。　畢竟如何。　偈。　不離當處。

と、端坐從容として寂す。

東嶺和尙と幽靈

白隱和尙の高足、東嶺和尙、京都等持院の請に應じて赴きしことあり、是より先、同院の小僧にて、十七八歲の某と云ふものありけるが、北野の妓

に通じ、交情頗る濃かに、竟に妓と計り、院主の不在を窺ふて、金百金を窃み、相携へて夜、伏見より舟に塔じ大阪に逃れける。而して、舟の大阪に着くや、懷を探つて金を得ざりければ、初めて逃走の際、彼の金を忘れ置きしを、知り、進退茲に谷り、悔恨の極、終に相共に縊れて死したり。其後、毎夜、院の側室にて、涕泣怨叫の聲聞え、柱なる釘を探つて曰く、我、金を此に忘れ置きたるに、金何故になきぞ。アヽ悲しと。且つ言ひ、且つ泣き、壁に、梁に、摸索して息まず。聞く者、心消え膽落ち、一院終に鬨として人なきに至る。東嶺和尚の將に等持院に入らんとするや、人の之の由を告ぐるものあり。和尚曰はく、敢て傷むなし。我其の室に居らんと。入院の夕果して怪事なし、後、和尚他の請によりて不在の折、其侍者なる、參河の昌禪人なるもの留守しけるが、夜半に至り、會々、一女人あり。其容貌甚だあるはしけるが、禪人の前に頓首していふ。妾は亡人なり。金を忘れたるの故を以て縊

死し、今に至るまで、苦輪を脱する能はず。願はくは、大善識の濟度を乞はんと、禪人曰はく、さらば、汝何ぞ東嶺和尚に請はざると。女曰はく、和尚高德、賤妾の近づき得べきに非ず。況んや、妾は是れ冥界の人なるをやと。禪人乃ち諾す。女謝して去る。後、禪人實を和尚に告ぐ。和尚曰はく、果して然るかと。念經の次、淨水を設け、水陸會の法を修す。是より幽魂復竟に由てず。

道元と猛虎

道元禪師（永平寺開山）壯にして宋に入り、天童山に登つて如淨を拜し、晝夜打坐して箇事を明むるに切なり。一日如淨巡視の序、一僧の坐しながら眠れるを見て、痛く一頓の棒を與ふ。師傍らにあつて之を開き、覺えず大悟し、遂に如淨の印可を受く。

師、曾て江西を行脚の節、一日荒村を過ぎ、日將に暮れんとす。會々、風急に吹きすさみ、一頭の猛虎、忽然と出て來り、牙を鳴らして師に迫らんとす。師少しも騷かず、其の所持の柱杖を拋ちて、避けて岩上に坐すれば、虎畏れて逃げ去る。

蓋、師の坐せし岩は、彼柱杖の龍と化したる頭上なりしなり。此の事、宋土にて希有の事なりと評し。竟に、畫となして尊崇すと云ふ。寒巖和尚（顯德帝第三の皇子、肥後大慈寺の開山）入宋の時、此の畫をうつして歸朝し、今に至りて、虎はねの柱杖と言ひて世に傳ふ。其一幅、江州大津の青龍寺に秘藏すと云ふ。

一休の神通

安藝の次休藏主なるもの、神通を有すと云ふ。一休和尚其禪機を觀破せ

んとして、紫野大德寺を立出て、遙かに途に上る。次休之を知り、侍者に謂つて曰はく、一休我を試みんとて來らんとす。我、其の饗應の資を求んと、山後の溪川に至り釣を垂る。既にして、一休到り、漁翁を見て次休の菴を尋ね。漁翁曰はく、汝は一休よな。我こそ汝の遙々來つて試みんとする次休なれと、一休驚いて曰はく、汝、何を以て之を知るかと。次休、笑ふて、一休を携へ菴に歸り、高談清話、時を移す。軈て饗應の爲にとて、先程釣り得たる鱸魚の膾、蓴菜の羹を出して一休に進め、尚其の羈旅の勞を慰めん爲め、神通を現はし見せんと、器中銀絲の鰻をとつてむしや〳〵と嚼み、再び盤上に吐き出しければ、忽ち潑溂たる魚となつて躍り上れり。一休是を見て曰はく、汝は死せる魚を活せり。是れ、劉綱が盤中に唾して、魚となせしと同一手段なり。我は此の魚を佛となして見すべしと。乃ち起つて高く裳を揭げ、したゝか坐上に裳をだれ、且つ曰はく、萬法一に歸す。され

ば三世の諸佛も這裡に秘存す。昔の少康師は、一たび南無と唱ふれば一佛口より出て、十たび唱ふれば十佛を出すと。されど、其は只口裡より出すのみ。我は即ち、肛門より佛を出すが故に、少康師に勝れりとて、呵々大笑す。次休嘆して曰はく、汝我を勘驗せんが爲に得々として來り、我亦汝を探らん爲にかゝる方便を用ふ。汝、未だ神通を得すと雖も、又格外の機を弄す。我今日、初めて作家に遭ひたり。我宗汝によつて大に盛ならんと。

隱元の奇特

隱元禪師、嘗て支那の獅子岩に住せし時、岩の側に一大塊石あり。中凹みて舟の如し、遊客其の平ならざるを惜む。師曰はく、時節來らは自ら平ならんと。後一夜、師、此の石上に坐し、持兇默禱して曰はく、我他に去つて黃檗の法門盛ならは、此石自ら平ならんと、香を焚いて歸る。翌朝、侍僧驚き

報して曰はく、石自ら平なりと。師、乃ち去つて海に航し、來朝して攝津の普門寺に住す。高才逸足の徒、其の德を望んで雲集し、京都所司代板倉周防守亦深く之に歸依し、恭敬弟子の禮を取る。一日茶を設くるの次、從容問ふて曰はく、師、昔、獅子岩の石を平かならしめしこと甚だ奇特なり。近來復奇特の事ありや、否やと。師曰はく、奇特神妙は小乘の事にして大乘の事に非ず。而も即今坐中奇特の事あり、汝之を信するや、否やと。所司代大に笑ふ。師曰はく、一椀の清茶能く人を醉はしむと。

寒山と拾得

寒山子は、世に謂て風狂の士となす。恒度を以て之を推すべからず。天台の始め、豐縣の西七十里に隱れ、常に寒岩幽窟の中に居り、以て定めとなす。時々、國清寺に來る。拾得といふ者あり。寺僧之に、食堂の事を司らしむ。

常に衆僧の殘食菜滓を收拾し、巨竹を斷て筒となして、其の中に投し、寒山來れは、即ち負ふて而して去る。二者、言行頗る奇異、或は廓下に徐行し、或時は叫噪人を凌ぐ、或は空を望んで漫罵す。寺僧耐へず、杖を以て逼逐すれは、飜て掌を撫てゝ呵々として徐ろに退く。然も其の布襦零落、面貌枯瘁し、樺の皮を以て冠となし、大木履を曳いて行く、初め閭丘寺に入つて寒山を訪問す。僧道翅對へて曰はく、此の人狂病なり。久しく寒岩間に居り、好んで詞偈を吟じ、言語常ならず。或は藏し、或は然らず。終に知るべからず。寺の行者拾得と友たり。相集つて言語する、詳悉するべからずと。閭丘、之を拜するを見て驚いて曰はく、太守、何ぞ風狂漢を禮するやと。寒山、拾得、乃ち臂を連ね笑傲して寺を出ず。閭丘、復た、寒岩に往いて謁問し、衣裳及び藥物を贈れば、乃ち、高聲に偈言して曰はく、我を賊とす、賊退くと云つて、便ち、身を縮めて岩石穴縫の中に入れり。復た曰はく、汝諸人に

報ふ、各々努力せよと。岩石穴縫泯然として合し、杳として蹤跡なし。乃ち僧道翅をして、其の遺物を尋ね求めしむ、唯、林間に於て、葉を綴つて詞頌を書したるもの、幷に村野の人家の壁に、抄錄する所、二百餘首を得て編して一集となす。人多く諷誦す。

不見不聞

壽州道樹禪師は、唐の人なり。三峯山に菴を結んで居る。會々野人あり。容貌粗野、屢々來つて、詭辯奇譚を弄し、或は佛の形、菩薩、羅漢、天仙等の形を現はし、或は神光を放ち、或は異響をなす。衆徒、皆能く測ること能はず。此の如きもの十年、後竟に寂として形影なし。師、衆に告げて曰はく、野人種々の技倆をなして、人を欺瞞すと雖も、竟に老僧が、不見不聞に勝つこと能はず。彼が技倆は究りあり。老僧が不見不聞は究りなければなりと。

五臺山の文珠

無着文喜禪師、五臺山に入つて、文珠に見えんことを求む。忽ち、一の山翁に逢ふ。師、禮して曰はく、願はくは、文珠菩薩に見えんと。翁曰はく、文珠未だ見るべからず。汝已に喫飯し了れりや、否や。師曰はく、未なり。翁、乃ち導いて寺に入り、師を引いて坐を與へ、童子をして玳瑁の杯を進めしむ。濺ぐ處酥酪の如し。師、飲み了つて心神清朗なるを覺ゆ。翁曰はく、南方の佛法如何か住持す。師曰はく、末代の比丘少しく戒律を奉ず。曰はく、多少の衆ぞ。曰はく、或は三百、或は五百と。師反つて問ふ。此の間、佛法如何か住持す。曰はく、龍蛇混雜、凡聖同居。曰はく、衆幾何ぞ。曰はく、前三三、後三三と。遂に與に、談論して暮に至る。翁、童子に命じて師を送らしむ。行く事未だ幾何ならず、悽然として、先きの翁は即ち文珠なり。再び見るべからざるを

悟て、童子を拜して、一言の別を乞ふ。童子即ち、無垢無染、即眞常と言ひ訖つて寺と共に隱る。只、五色の雲中に、文珠、金色の獅子に跨り、往來するを見しが、白雲忽ち之を覆へして見えず。

訥菴水に投ぜらる

大橋順藏は、別に訥菴と號す。奇骨稜々一世を睥睨するの儒家なり。高杉晋作、酒井傳次郎（大和の義擧に死す）廣田精一（甲子の變に死す）河村顯義（坂下門に死す）中井弘（故の滋賀、京都、知事）等皆其の門より出づ。以て、其の人物の如何を知るべし。壯年の頃、日々黄昏の頃より外出し、夜更け、或は曉に徹して皈宅することありき。妻の父、之を怪み、其の別に通ずるの婦女あるを疑ひ、意に離緣の事を唱ふるに至れり。妻曰はく、貞女兩夫に見えず。且又我が夫、如此不倫なしと。固く爭ふて止む。蓋し、訥菴、此の際窃に、

禪を修めしなり。後復、忽然土藏の一隅に潜居し、人に知らさざること一年餘にして、漸く一小冊を手にし出て來る。即ち闢邪小言なり。其梓に上すや、洛陽の紙價爲に高しと稱せらる。一日床に踞して引船の川上に納涼す。門弟等、交々問ふて曰はく、先生、曾て坐禪したることありと。果して眞かと。訥菴曰はく、百般の學術、盡々く實證なくんばあるべからず。我が禪を學びたるの眞僞を知らんと欲せば、汝等、先づ我を此のまゝ水中に投じ見よと。門弟等乃ち起つて訥菴を抱き、河中に投ず。訥菴平生游泳の術を知らずと雖も、只漂々として、水に任せて流れ行き。少しも苦悶の狀を見ずと云ふ。

無生法

嵩山に廟あり、靈驗著しとなし、遠近競ふて之を祭る。殿中唯一竈あるのみにして、而して物命を損すること甚だ夥し。嵩岳破竈墮和尚、一日侍僧を率いて廟に至り、其携ふる所の杖を揮ふて、竈を打つこと三たび曰はく、汝本と泥瓦合成す。聖何れより來り、靈何れより起ると。復打つこと三度にして、竈自ら崩壞し、忽ち衣冠壯嚴の一神人出て來つて、和尚の面前に拜謝し、曰はく、我元と、此の廟の神なり。久しく宿業の繫縛する所となる。今日、初めて無生法を聽いて、解脫するを得たり。敢て拜謝すと。和尚曰はく、是れ汝が本有の性なり。我敢て言ふにあらざるなりと。神人再拜して沒す。侍僧乃ち問ふて曰はく、我多年和尚に侍して、未だ垂示を蒙らず。今日、神人何の所得ありて、解脫するを得たると。和尚曰はく、敢て彼に向つて授くべきものなし。我只問ふ「汝本と泥瓦合成す。聖何れより來り、靈何れより起ると」

懷空虎を度す

懷空禪師は、唐の人なり。菴を安陸の定安山に結んで住す。會々、村人虎を追ふて山に入り、師を見て喜んで曰はく、頃日虎多く、往々村閭に出でゝ人畜を害す。師請ふ之を討つの法を與へよと。師曰はく、虎も亦衆生なり。汝等若し、彼を屠殺せば、彼亦汝等に害を報ぜん、斯くて、相報償せば何れの日か惡因果の業鎖を斷ぜん。我汝等の爲に計るに、之を攘ひ去るに如かずと。此に於いて、村人、道場を設け、師を請じて法筵を開く。日暮るゝに及んで、一虎あり、來つて瞑目して、地に伏す。師咄して曰はく、汝惡類、一報未だ滅せずして、更に宿殃をなして人畜を害す。死して當に地獄に墮すべし。我れ深く汝を憫むと。虎叱せられて、遲々として去る。明日、筵散して、師、山に歸るや。虎七子を率ゐて菴前に來り、伏す。師乃ち齋餘を投して與

ふれば、各々食し了り、相次で死す。

六祖大師

臨濟宗、東福寺派の某智識、一日書生兩三輩に向つて、禪の決して、理屈文字を以て至るべきに非らざるを說くの序、忽ち壁間に掲げある一軸を指して曰はく「たゞあの腰に石を結びつけて、碓を踏んで居る老爺、あれが即ち、六祖慧能大師ぢや。此人は、未だ小さい時分に、父親を失くして、其れに餘程の貧乏人であつた爲めに、學問などする暇がなかつたから、一生涯、所謂文盲で、一文字も書けなかつたのさ。其れで、毎日山へ入つて薪を取り、市中へ擔ぎ出して、其れを賣つて、漸く母を養ふて居つたのだ。處が、或る日人の金剛經の「應無所住而生其心」と云ふ句を讀むのを聽いて、大悟徹底したのだ。其處で、近邊の寺へ往つて問答して見るに、皆

んな腥坊主許りて仕方がない。或人が、黄梅縣の東禪寺に、五祖弘忍大師が居らるゝから、其へ往つて見よと敎へたけれど、貧乏て、費用もなく又母を養つて呉れるものがない。其處て、村の者などが、可愛想だと思つて、皆んな費用を出して呉れた上に、母をば世話して呉れる都合になつたので、漸く、右の東禪寺へやつて來たのだ。此の人は、餘り身體が小さい上に、顏が猿に似ておつたから、五祖が笑つて、お前の方の山の中にても佛法があるかと揶揄ふた。依つて直ぐ樣、佛法は心を主とするもので、形骸を以て輕重すべきものではあるまいと言つた。五祖も、此者見込があると思つて、盧行者と名づけ米搗小屋において、やつた。毎日米を搗いて、大勢の者に、盧行者〳〵々々と追ひ遣はれ、賤にハヤ、三文の價値もないのだ。あの、掛物の畫が、其時の姿ちや。處が五祖が最早法を嗣くべき者を見立て、第六祖を推らへねばならぬので、或日大衆を呼び集めて、皆んな自

心の本體について、偈を作つて來よ。其の試驗に合格したものを、第六祖として、衣鉢を傳へてやると宣告した。サア、大騷きだ、衣鉢が貰ひ度いので、皆んな偈を作つて、我こそ第一番にならうとするけれど、中々出來ない。何百と云ふ門弟の中で、神秀上座と云ふがある。是がマア、一頭地を拔くと云ふ高弟の一人て、偈を作つて見たが、直に五祖の目の前に出すも如何ぢやと思ふて、窃に、廊下の壁に貼り付けた。其は「身是菩提樹、心如明鏡臺。時々勤拂拭、勿使惹塵埃。」と云ふのであつた。大衆は、こいつは名句だ。是が第一番てあらうと言つて、偈の下に群つて、眺めて居る。五祖が、此の偈を見て、此の句を讀んでおれば、惡疫などに罹らぬと言はれた。處が例の盧行者は、何てもエライ偈が出たと云ふのを聞いて、自分も見物に出懸けた處。一文字も讀めないので、小僧に讀んで貰ふたが、格別感心もせず、自分も一つ偈を作らうと云つて、小僧に書かして、先きの偈の

傍に貼らした。其は「菩提本無樹。明鏡亦非臺。本來無一物。何處惹塵埃。」と云ふのである。大衆共は、あの盧行者めが偈をやつたそうな。生意氣な事をすると、見に來たけれど。サア、是の無一物と云ふことが解らぬ。五祖は、復通りかゝつて、其を眺むるや否や、斯んな馬鹿な事を書いてと言つて、引き破つて仕舞つた。其して其の晩、人の眠靜つてから、窃に盧行者を喚び寄せて、我が法を嗣いて第六祖となるものは、お前より外にはないと言つて、衣鉢を授け、此處に居ては殺されるから、早く逃げろ。と言はれたので仕方なく、夜逃をした。翌朝になつて、大衆共は、五祖の室に行つて見ると、何時も在る處の衣鉢がなくなつて、五祖は坐つたまゝ、こくりこくりと居睡りをやつてゐる。サア、寺の中は大騒動だ。愈々盧行者めが衣鉢を盗んで夜逃げしたと云ふので、其々手を分けて、亦追つかけた。其の中に明上座と云ふのがある。是の人は、陳の宣帝の孫で、皆なが將軍々々

と言つてゐつた。丈、大兵の骨組、其の上恐ろしい大力であつた。非常の足早であるから、遂に大瘦嶺と云ふ所で、盧行者に追つ着いた。盧行者は、もう明上座が犇々と迫つて來たのを見て、迚もやりきれないと思ひ、衣鉢を岩の上に置いて「此の衣は信を表す、力を以て爭ふべけんや、君が將ち去るに任す」と言つて、路傍の林の中に匿れて見て居つた。明上座は、此の衣鉢さへあれば良いと、兩手を掛けた處、丸で大盤石の地底から生えた樣で、動かない。汗を流し、金剛力を出しても仕方がない。其處で、我を折り平降して「我來つて法を求む、衣の爲めにあらず」とあやまつた。是れが、能く新聞にある心機一轉だ。ハヽハヽ、盧行者が其處で、林の中から「不思善不思惡、正當恁麼の時那箇か是れ明上座本來の面目」と言つた。處が明上座は言下に大悟徹底し。三拜九拜して涙を流しながら「上來密語密意の外、還て更らに密處ありや否や」と問ふた。盧行者は、復「汝

若し、自己が本來の面目を反照せば、密は却て汝が邊にあらん、我汝が爲に說かば即ち密にあらず」と答へた。流石の明上座も此の三寸法師の樣な文盲の廬行者の爲にとう〳〵我慢の角を折つて、弟子にして呉れと賴んだが許さない。早く五祖の許に歸れと言つて、行者は其のまゝ往つて仕舞つた。此の明上座は、後に蒙山の明道禪師と云つて、エライ者になつた……」

達磨の幽靈

達磨大師の支那に於て滅度せしは、梁の大通二年、戊申十月五日にして、我が繼體天皇の二十二年なり。門人之を熊耳山の定林寺に葬る。後三年を經て、魏の使宋雲、西域より還り、葱嶺に於て、大師が隻履を携へて來るに逢ふ。孝帝詔して、壙を開いて之を視せしむるに、唯、空棺隻履の存する

のみなりと云ふ。其の後、八十四年を歷て、推古天皇の二十一年十二月、朔聖德太子、大和の片岡を過ぐ。時に達磨大師、飢人の相をなして、弊服襤縷にして路傍に臥す。眼に異光あり、其の體甚だ香ばし。太子、乃ち和歌を詠して之に問ふて曰はく、

しなてるや片岡山の飯に餓ゑて
ふせる旅人あはれをやなし

と、大師頭を擡けて之に酬ふて曰はく、

いかるがや富の小川のたえばこそ
わが大君のみなはわすれじ

太子、飮食を與へ、紫衣を脫いで之を覆ふ。曰はく、乞ふ快く安寢せよと、明日使を遣はして之を看せしむるに、使者歸り報して曰はく、飢人既に殂すと。太子悲慟して、駕を命じて片岡に馳せ、親しく穴葬す。數日を經て太

子感する所あり、使臣をして壙を開かしむるに、前日賜ふ所の紫衣曇ん
て棺上にあり、他の一物を存せず、太子乃ち其衣を取つて自ら之を服す。
時人曰はく、唯々聖々を知ると。

鄧州二たび怪を見る

中原鄧州は別に南天棒と號す。其の嘗て、山岡鐵舟が贈る處の南天の棒
を以て、常に人を接得するが故なり。年十九にして、遠州奥山の方廣寺に
掛錫し、龍水禪師に參ず。時會々結制に當り、四方の雲衲來り集まるもの、
五百名餘り、未曾有の盛況なり。五月三日の夜、明月皎々、奥山を照らし、大
衆深く三昧に入つて物靜かなる時、忽ち人の痛叫する聲ありて、禪堂の
上に聞ゆ。衆愕然として耳を聳つれば、或は佛殿、或は堂塔等を徘徊し、其
の聲悽愴、聞くに堪へず。殆んど寒毛をして卓竪せしむ。翌日、龍水禪師、坐

に上つて曰はく、昨夜當山の鎮守なる半僧坊、此の會に臨める一住職の
所志を惡んで、之を抱き、境内を三匝し、其の衣帶を脱き、此所を去ること
三里餘の、一村落の屎瓶に投じたり。汝等もし、施物を費し、光陰を空過せ
は、又復、此の如けんと。鄧州衆中にあり、之を聞いて、奮然勇猛の氣を發し、
靜坐勤かざること三晝夜、覺に忽然として打發す。後諸所の叢林を踏破
し、二十六歳にして九州にあり。文久四年の春、伊豫國小松長福寺の伽山
老師を送り、豐後三ツ川に至るの歸途、肥後の國境坂無峠を越え、阿蘇山
に登せんとし、誤つて猫ケ嶽に迷ふ。折柄一天忽ちかき曇り、黒雲茫々、鎖
し、來つて咫尺を辨ずべからず。鄧州乃ち樹下に踞して、公案を拈提する
數刻、驟て前面の草木騒々として鳴るや、否や、一丈五尺餘の大蛇あらは
れ出て、樹邊を一匝して去る。已にして、天漸く晴れ、日光麗朗たり。鄧州辛
ふじて阿蘇山に詣て、遂に見性寺に到り、傑岳禪師に見えて途上の狀を

語る。師曰はく、猫ケ嶽古來怪多く、殊に大蛇ありて往々人を惱す由。子の遭遇せしものは或は雲門重語の鼈鼻蛇ならんと、相顧みて大笑す。

證道歌

（永嘉大師）

君不レ見絕學無爲閒道人。不レ除二妄想一不レ求レ眞。無明實性即佛性。幻化空身即法身。法身覺了無二一物一。本源自性天眞佛。五陰浮雲空二去來一。三毒水泡虛二出沒一。證二實相一無二人法一。刹那滅却阿鼻業。若將二妄語誑一衆生一。自招二抜舌塵沙劫一。頓覺子如來禪。六度萬行體中圓。夢裡明々有二六趣一。覺後空々無二大千一。無罪福無二損益一。寂滅性中莫レ問覓。比來塵鏡未レ曾磨。今日分明須二剖折一。

誰無念誰無生。若實無生無不生。喚取機關木人問。
求佛施功早晚成。放四大莫把捉。寂滅性中隨飲啄。
諸行無常一切空。即是如來大圓覺。決定說表眞僧。
有人不肯任情徹。直截根源佛所印。摘葉尋枝我不
能。摩尼珠人不識。如來藏裡親收得。六般神用空不
空。一顆圓光色非色。淨五眼得五力。唯證乃知難可
測。鏡裡看形見不難。水中捉月爭拈得。常獨行常獨
步。達者同遊涅槃路。調古神清風自高。貌頼骨剛人
不顧。窮釋子口稱貧。實是身貧道不貧。貧則身常披

縷褐。道則心藏無價珍。無價珍用無盡。利物應緣終
不悋。三身四智體中圓。入解六通心地印。上士一決
一切了。中下多聞多不信。但自懷中解垢衣。誰能向
外誇精進。從他謗任他非。把火燒天徒自疲。我聞恰
如飲甘露。銷融頓入不思議。觀惡言是功德。此則成
吾善知識。不因訕謗起怨親。何表無生慈忍力。宗亦
通說亦通。定慧圓明不滯空。非但我今獨達了。恒沙
諸佛體皆同。獅子吼無畏說。百獸聞之皆腦裂。香象
奔波失却威。天龍寂聽生欣悅。遊江海涉山川。尋師

訪道爲參禪。自從認得曹谿路。了知生死不相關。行亦禪。坐亦禪。語默動靜體安然。縱遇鋒刀常坦々。假饒毒藥也閒々。我師得見然燈佛。多劫曾爲忍辱仙。幾回生幾回死。生死悠々無定止。自從頓悟了無生。於諸榮辱何憂喜。入深山住蘭若。岑崟幽邃長松下。優遊靜坐野僧家。閱寂安居實蕭洒。覺則了不施功。一切有爲法不同。住相布施生天福。猶如仰箭射虛空。勢力盡箭還墜。招得來生不如意。爭似無爲實相門。一超直入如來地。徂得本莫愁。末如淨瑠璃含寶

月。我今解此如意珠。自利々他終不歇。江月照松風吹。永夜清宵何所爲。佛性戒珠心地印。霧露雲霞體上衣。降龍鉢解虎錫。兩鉗金環鳴歷々。不是標形虛事持。如來寶杖親蹤跡。不求眞不斷妄。了知二法空無相。無相無空無不空。卽是如來眞實相。心鏡明鑑無碍。廓然瑩徹周沙界。萬象森羅影現中。一顆圓光非內外。豁達空撥因果。棄有著空病亦然。還如避溺而投火。捨妄心取眞理。取捨之心成巧僞。學人不了用修行。眞成認賊將爲子。損法財

滅功德。莫不由斯心意識。是以禪門了却心頓入無生知見力。大丈夫秉慧劍。般若鋒兮金剛焰。非但能摧外道心早曾落却天魔膽。震法雷擊法鼓。布慈雲兮洒甘露。龍象蹴蹋潤無邊。三乘五性皆醒悟。雪山肥膩更無雜。純出醍醐我常納。一性圓通一切性。一法徧含一切法。一月普現一切水。一切水月一月攝。諸佛法身入我性。我性還與如來合。一地具足一切地。非色非心非行業。彈指圓成八萬門。刹那滅却三祇劫。一切數句非數句。與吾靈覺何交涉。不可毀不可讚。體若虛空勿涯岸。不離當處常湛然。覓則知君不可見。取不得捨不得。不可得中只麼得。默時說々時默。大施門開無壅塞。有人問我解何宗。報道摩訶般若力。或是或非人不識。逆行順行天莫測。吾早曾經多劫修。不是等閑相誑惑。建法幢立宗旨。明々佛勅曹谿是。第一訶葉首傳燈。二十八代西天記。歷江海入此土。菩提達磨爲初祖。六代傳衣天下聞。後人得道何窮數。眞不立妄本空。有無俱遣不空々。二十空門元不著。一性如來體自同。心是根法是塵。兩種

猶如鏡上痕。痕垢盡除。光始現。心法雙亡。性則眞。嗟末法惡時世。衆世薄福難調制。去聖遠兮邪見深。魔强法弱多怨害。聞說如來頓教門。恨不滅除令瓦碎。作在心殃在身。不須怨訴更尤人。欲得不招無間業。莫謗如來正法輪。旃檀林無雜樹。欝密深沈獅子住。境靜林間獨自遊。走獸飛禽皆遠去。獅子兒衆隨後。三歲便能大哮吼。若是野干逐法王。百千妖怪虛開口。圓頓教沒人情。有疑不決直須爭。不是山僧逞人我。修行恐墮斷常坑。非不非是不是。差之毫釐失千

里。是則龍女頓成佛。非則善星生陷墜。吾早年來積學問。亦曾討疏尋經論。分別名相不知休。入海算沙徒自困。却被如來苦呵責。數他珍寶有何益。從來蹈蹬覺虛行。多年枉作風塵客。種性邪錯知解。不達如來圓頓制。一乘精進無道心。外道聰明無智慧。亦愚痴亦顛。密奉指生實解。執指爲月枉施功。根境法中虛担怪。不見一法即如來。方得名爲觀自在。了則業障本來空。未了還須償宿債。飢逢王膳不能喰。病遇醫王爭得瘥。在欲行禪知見力。火中生蓮終不

壞。勇施犯重悟無生。早時成佛于今在。獅子吼無畏
說。深嗟懵憧頑皮靼。但知犯重障菩提。不見如來開
秘訣。有一比丘犯婬殺。波離螢光增罪結。維摩大士
頓除疑。猶如赫日銷霜雪。不思議解脫力。妙用恒沙
也無極。四事供艱敢辭勞。萬兩黃金亦消得。粉骨碎
身未足酬。一句了然超百億。法中王最高勝。河沙如
來同共證。我今解此如意珠。信受之者皆相應。了々
見無一物。亦無人兮亦無佛。大千沙界海中漚。一切
賢聖如電拂。假使鉄輪頂上旋。定慧圓明終不失。目

可冷月可熱。衆魔不能壞。眞說。象賀崢嶸謾進途。誰
見蟷螂能拒轍。大象不遊於兎徑。大悟不拘於小節。
莫將管見謗蒼々。未了吾今爲君決。

殺活自在禪定力終

明治三十六年七月一日印刷
明治三十六年七月二十日發行

禪定力
正價二十錢

著作者　森脇星江
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區鍋町二十一番地
印刷者　森潤二　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

著作權所有

發兌　東京市神田區鍋町二十一番地　電話本局三〇六七番　大學館

15/6/41

早田玄洞君著

禪の人物鍛成

價廿五錢　郵稅四錢

生死を脱離し、慾火を滅盡し、膽力を練磨し、禪機に悟入し、眞理を會得せんとせば本書を繙け、禪學に關する一切の綱目を網羅して盡さゞるなし。

森脇星江君著

禪學無一物修行

價二十錢　郵稅四錢

家を捨て、妻子を捨て、財產を捨て、所謂俗界の繫累を脫して禪學に志す事多年悟つて迷ひ迷ふて悟り困苦憂慮と戰ひ精神の鍛練を務めたる修行奇譚なり。

森脇星江君著

殺活自在 禪定力

價二十錢　郵稅四錢

本書これを殺活自在、金剛三昧力、極致達道、活商量、格機格外、大獅子吼、生死脫却、戰陣臨終、不可思議力の諸篇に分ち、和漢古今の傑物が逸話を網羅して偏に禪道の奧儀を提供す、附錄に永嘉大師の禪道歌を載す。

早田玄洞君著　岡落葉君畫

膽力修行

再版　價廿五錢　郵稅四錢

曰く、古寺、曰く人魂、曰く化地藏、曰く古刑場、曰く雨夜の怪談、曰く丑の刻、曰く古城の櫓、曰く巖谷の一夜、曰く食人怪、曰く死人の番、曰く青面鬼、項目の奇々怪々一讀して粟肌に生ずる思あり、記事頗る荒誕にして而も一として實蹟に非ざるはなし、附錄として坐禪工夫を載せたり。

文學博士井上哲二郎先生題　文學博士元良勇次郎先生序
希臘人キセノフオーン著　木村鷹太郎先生譯

ソクラテース 人物養成譚

第五版　價四十錢　郵稅六錢

◎本書は「クランクリン」無二の愛讀書なり◎本書は聖哲「ソクラテース」が單身市井を徘徊し快妙の方法により各種各異幾多の人物を養成したる奇絕の事業談なり◎本書は「ソクラテース」の性行、經歷、逸事は殆ら了解せり◎本書は四洋論語として其名高く歐米諸國教育家が必ず一本を携帶せざるなしと云ふ。

木村鷹太郎先生著

王陽明人物養成譚

價三十錢　郵稅四錢

大人物の學とは何ぞ、人間第一の事業とは何ぞや、德性涵養とは如何、良知とは如何、天下一家とは何ぞ、文章の末技を斥け、道德の根本を敬ふ、國家有用の材、經世治國を思ふの青年が精讀すべきもの書を忘れて可の本ならんや。

木村鷹太郎先生著

孔子 孟子 荀子 人物養成譚

價三十錢　郵稅四錢

孔子が春秋を著して正邪を明にしたる大學論語に依てその主義を說き儒教の根本に開きたる孟子の孟子教を著はし義を重じて利を却けたる孔子の遺志を嗣きて性善說を唱へたる荀子の荀子性惡說を唱へたる、各々其大と其想を異にしたる從て人物の弟子を養成する道に特點あり、今之を評騭し論議して儒家の面目を明にせるもの本書を以て嚆矢とす。

木村鷹太郎先生著

莊子人物養成譚

價三十錢　郵稅四錢

天下以て此人なかる可からず、亦以て此書なかる可からず、莊子の無用は實に當今の大實用なり、列子は莊子の先賢なり又其旨を同うす、本書は此等兩哲人の思想の主要を平易に書き表はせり、本書を讀むもの莊子列子が偉大の言說を味ひて、人物を養成す可し。

徳川家達公題字　富田鐵之助君序
黒田清隆伯題字　松本豐多君序
副島種臣伯賛評　安部正人君選
勝海舟先生西郷南洲先生に贈る眞筆

海舟先生 精神修養談

價三十錢　郵税四錢

海舟は幕末の英俊なり眼中名利なく腹空邪念なし此を以て説處天地の眞理に合し談する處時勢の弊處に當る本書は著者が先生に侍する事多年その口述せられたるものを筆記せるもの、一讀先生の面目躍如として紙上に活動す殊に山岡鐵舟、西郷隆盛の人物評に到つては嘗て卷中讀論すべきものたり。

竹内楠三先生著

耶蘇人物養成譚

價三十錢　郵税四錢

バイブル一篇如何に偉大の感化を後世に遺したるや歐洲全國は云ふに及ばず延ひては南洋東洋諸國に到るまでその勢力を伸張して天下殆んど耶蘇教國たらんとす基督の力亦偉なる哉基督がその弟子を養成するに如何なる道を以てしたるか俗人凡衆を感化するに如何なる道を以てせるやバイブルを基として延ひて歴史上よりこれを餘蘊なく説明せるものは本書なり。

細川華族女學校長題　松本豐多翁序
本居東宮侍講序文　柳橋絢子女史序
高橋泥舟翁校閲　安部正人撰

鐵舟夫人 英子談話 女士道

價三十錢　郵税四錢

英子女史經歴談、武士道の必要女士道とは何ぞや、女子の國家に對する責任、男女同權説に就て、差別上よりの優劣、女子の品裝、女子教育と其處世の秘訣、女子の職業と婦姑別居、自由結婚と獨立との是とに就て、男女は二にして不二女子の性特と健康以上は重なる目次にしてこれを數多の細目に分ちて詳論せり。

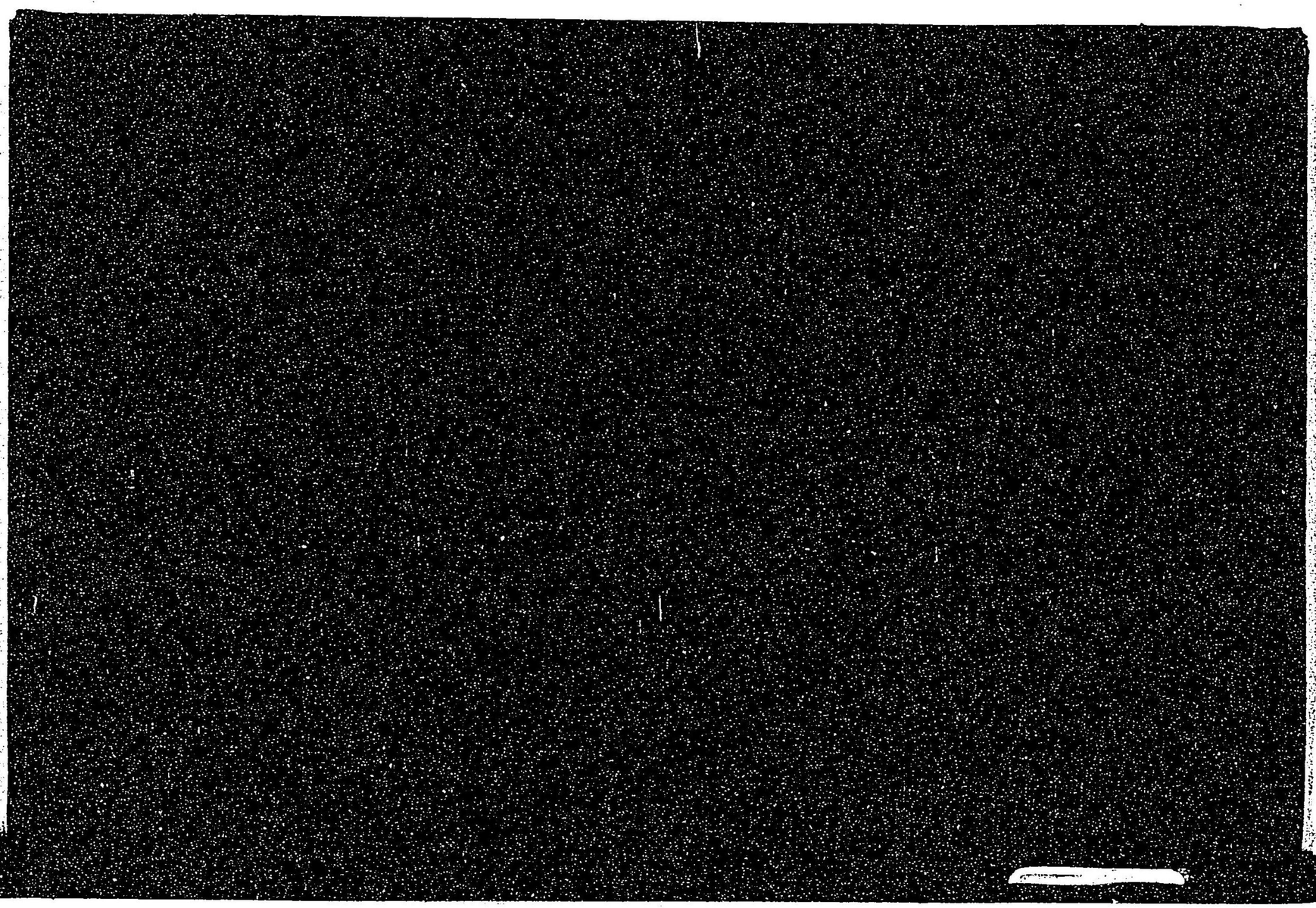
近藤不二君著

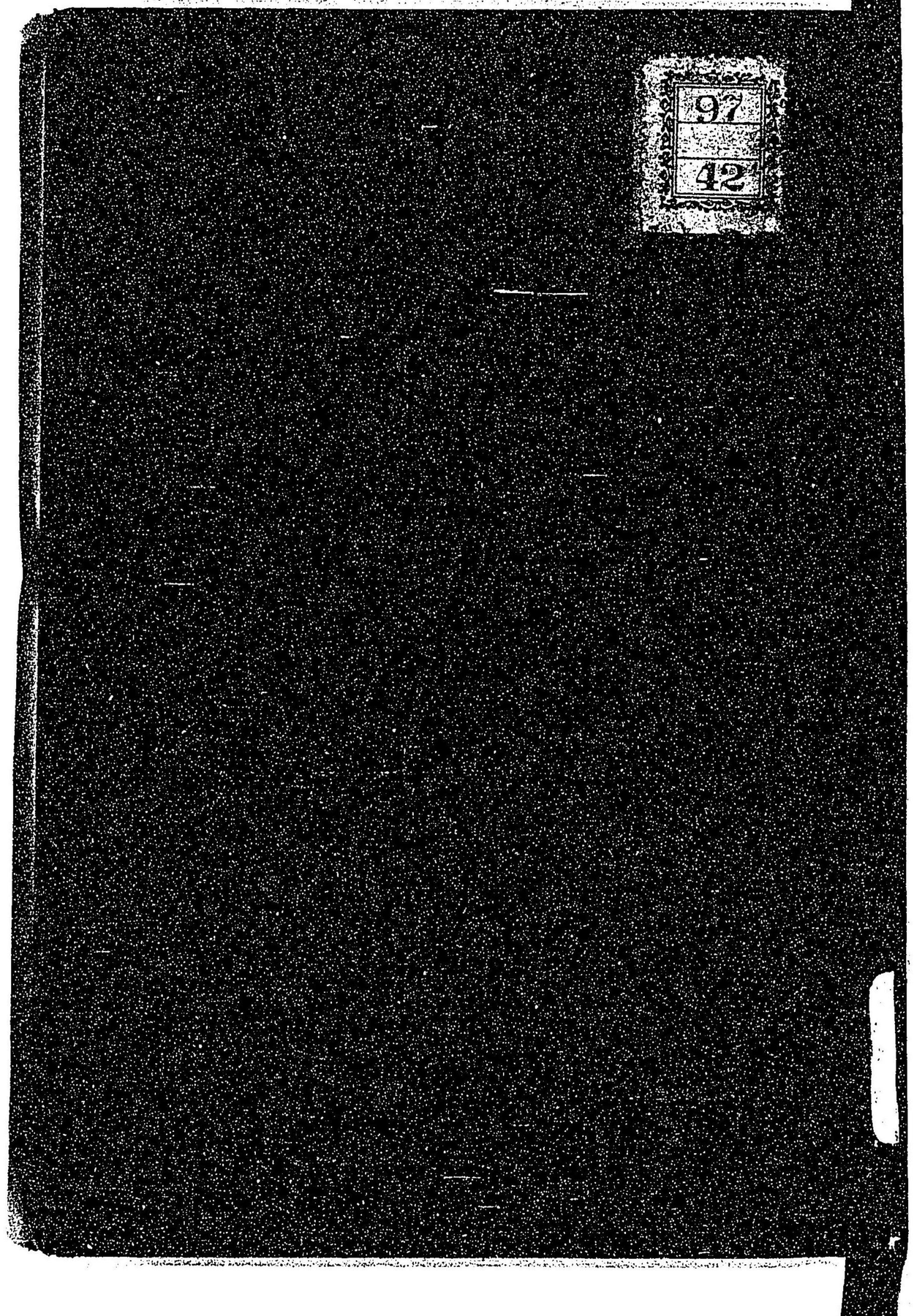
不老長生の魔術

價十五錢　郵税二錢

衛生と大死、不老不死、必的療病法、心力感傳の實施、催眠術の原因、自然の命數と人爲の長生、精神的長生の秘訣、仙家延命法他力延命法、長生示要、高僧の長生訓等總て心理學を基礎とし、種々不思議なる現象を説明す。

97
42





019628-000-2

97-42

禅定力

森脇　星江／著

M36. 7

ABG-0408